



宗教のあとに在ること

足場なき優しさの構造

身体は正しいとは主張しない。

身体はただ、ここに在ると主張する。

目次

アーティスト・ノート		4
オリエンテーション		6
はじめに	7	
第一部 一 基盤		
1 一 気づかれない跳躍	9	
2 一 世界の内側の神	13	
3 一 一つのもの、多くの形	17	
4 一 なぜ優しさは構造的なのか		21
第二部 一 足場		
5 一 建築	28	
6 一 テキストの中の刃		34
7 一 機構	40	
8 一 記録	48	
9 一 反証テスト	71	
10 一 あなたは確信しているか？		73
第三部 一 倫理		

11 — 教義なき意味	80
12 — 終極の倫理	84
13 — 正義感なき矯正	90
14 — 身体という羅針盤	93
15 — 他者なき生	97

作家の覚書

アーティスト・ノート

宗教のない世界は単に望ましいだけではないと私は信じている。それは不可欠なのだ。

宗教的な人々が問題だからではない。彼らは問題ではない。

モスクで祈る人は私だ。修道院の僧は私だ。壁に立つラビは私だ。マドラサの子供は私だ。

私たちは皆、同じ建物の窓だ。すべての窓。すべての眺め。

問題は足場だ — 倫理を、解釈可能であり、したがって操作可能であり、したがって武器化可能な権威から導出するという建築的決定。

問題は構造的であり、個人的ではない。

私はとても長い間、同じ問いを問い続けてきた。私たちは本当に分離しているのか？

世界を見ると、一つの仮定がもたらしている損害が見える — あなたと私は最も根本的なレベルで分離しているという仮定だ。それは残酷さの中に見え、無関心の中に見える。人々を救済された者と救済されない者、値する者と値しない者、私たちと彼らに選別するシステムの中に見える。

宗教は、その選別の最も強力で、最も持続的で、最も帰結的な具現化だ。分離性に向かう生物学的選別習慣 — 個体の生存には不可欠な — を取り上げ、それを聖別する。神を世界の外に置き、権威の階層を導入し、選別に全能の神の祝福を与える。

二千年にわたるその代償は、数千万の屍で測られる。この文が書かれている今も、代償は積み上がり続けている。

ニヒリズムではない。空虚ではない。

虚無主義ではない。空虚ではない。

より慈悲深く、より優しく、限りなく残酷さが少なく、そして絶対的により正直な世界。

誰も他の誰よりも特別ではない。

誰も太陽に近くは立たない。

私たちは皆、砂漠の砂粒にすぎない。

この本は、一つの問いと正直に向き合い、それがどこに導くかを見届けることを求める。

私たちは本当に分離しているのか？

— G

This is a standalone book in The 420 Code corpus. It is the direct complement to The Illusion of the Other, which was the first book I ever wrote — the gentle door. This book is the complete walk-through.

Behind it stands over a million words of formal derivation, forty-two Artist's Proofs, and 258 kill switches — specific, stated, falsifiable conditions under which every claim dies. The formal work exists. It is published free, forever, at the420code.org.

The reader does not need any of that. This book earns its own case within its own pages. Every term from the formal work is defined where it appears. The references to the420code.org are invitations, not dependencies.

本は三部構成だ。

第一部は、私たちが何であることを確立する — いかなる足場も建てられる前の、多として現れる一。

第二部は、足場の代償を示す — 構造的に、歴史的に、そして身体において。

第三部は、その後に来るものを記述する — 宗教の後の世界で生きるための実践的オリエンテーション。

各部分が次の部を獲得する。

最後まで読めば、結論は驚きとは感じられないはずだ。

ずっと知っていたことが、ようやくはっきりと語られたと感じるはずだ。

それはあなたがずっと知っていたことが、今ようやく明確に語られるのを聞くような感覚であるべきだ。

序論

あなたと私は最も根本的なレベルで分離しているという仮定だ。

この仮定は自明に感じられる。事実のように感じられる。

しかしそれは事実ではない。

それは道具であったことを忘れてしまった生存のための道具だ。

それは道具であることを忘れてしまった生存の道具である。

宗教は神を世界の外に置く。権威の階層を導入する。同じ神の権威のもとに愛と暴力の両方を含むテキスト群を生み出し、どちらの読みが正しいかを判定する構造的機構を持たない。

二千年にわたるその結果は、数千万の屍で測られる。

この本は、なぜそれが起きたかを検証する — 宗教的な人々の失敗としてではなく、建築の失敗として。そしてその後に来るものを記述する。空虚ではない。虚無主義ではない。より慈悲深く、より優しく、残酷さが少なく、より正直な世界へのオリエンテーション。

終端倫理は神に命じられたものではない。現実そのものの構造から導出される。検証可能で、反証可能で、永久に無料だ。

卑劣な奴になるな。優しくあれ。

第一部

基盤

いかなる足場も建てられる前の、私たちが何であるか。

第1章

気づかれない跳躍

人は静かで持続的な感覚とともに人生を歩む。私はここにいる、目の奥に、皮膚の内側に。他のすべては私の外にある — 他の人々、他の心、騒音、天気、星々。親密な瞬間でさえ、基本的な感覚は残る。

私がいる。そして私でないものがある。

この感覚はあまりに自明で、ほとんど誰も疑問に思わない。それは解釈ではなく事実として現れる。言語の前に到来し、議論の後も残る。

それは私が最初に知ることであり、最後に疑うことだ。

しかし問うに値する一つの問いがある。単純な問いだが、すべてを変える。

分離性は私が何であるかについての根本的眞実なのか？それとも、私が立つ場所からそう見えるだけなのか？

私が分離していると感じる最も単純な理由は私の身体だ。

私の神経系は生存のために構築されている。

脅威と機会を地図化する。有機体に属するものと属さないものを知っている。空腹はここで感じられる。痛みはここで感じられる。すべての信号が同じことを言う：この身体を守れ。

生き延びるという観点から、世界を「私」と「私でないもの」に分けることは完全に理にかなっている。自分と環境の区別がつかない動物は長くは生きられない。

分離性は間違いではない。生存戦略だ。

しかし戦略は眞実と同じものではない。

地図は有用だ。地図は領土ではない。

身体の線の上に、心は語り手を加える。

私は感覚、記憶、恐れ、習慣、希望を持ち、それらを一人の人物に織り上げる。

これが私だ。これが私の人生だ。これが私が気にかけるものだ。これが私が恐れるものだ。

物語は有用だ。連続性を生み出す。学び、計画し、責任を取ることを可能にする。

しかしそれはまた、自己がもの — 他の固体の物体の世界を移動する固体の物体であり、他のすべてから封じられている — であるという感覚を強める。

「私」と言うとき、私たちは自分が何を意味しているか確かだろうか？身体か？人格か？心か？心の背後にある何かか？

確かでないのは、「私」の感覚がすでに組み立てられた状態で到来するからだ。それは自明として現れる。誰もそれが正確かどうかを問わない。

その中心が仮定されると、他のすべてが「他者」になる。

—

身体が線を引き心がそれを強めるなら、言語はそれを永続的に感じさせる。

言語は物事を名前のついた断片に分割することで機能する。

木。空。人。見知らぬ人。私のもの。あなたのもの。

これらの分割は有用だ。これなしには、コミュニケーションも、協力も、明晰な思考もできない。

しかし有用性は静かに混乱に変わりうる。

言語は分割するがゆえに、分割が現実の根本的な性質であるかのように思わせることがある。名前のついたものを、一つの過程の中のパターンではなく、本当に分離したものであるかのように扱い始める。

言葉は必要だ。しかし言葉は、つながりしかないところに分離性を示唆しうる。

—

分離性は個人にとどまらない。社会的になる。

集団を形成する。アイデンティティを受け継ぐ。「私たち」と「彼ら」の間に線を引く。

これは太古からのものであり、常に有害とは限らない。共同体は養いうる。共有された文化は帰属感を生む。

問題は、違いが距離になるとき — 「私と違う」が「私より劣る」や「私とは無関係」に変わるとき — に始まる。

その時点で、共感は任意になる。相手の内面の生活は視野から消える。否定されたからではない。もはや感じられなくなったからだ。

これは通常、残酷さとしてではない。

合理性として現れる。「彼らは私たちとは違う。」「彼らは私たちの価値観を共有していない。」

これらの文は穏やかに語られる。まさにそれがこれらの文に力を与える。

—

身体、物語、言語、集団の下に、ほとんど誰も自分がしていることに気づかない一つの動きがある。

私は分離していると経験する to 根本的に分離している。

その動きは自然に感じられる。しかし保証されたものではない。

経験は視点によって形作られる。視点は設計上限定されている。しかし限定は孤立を意味しない。

日の出を見るとき、それは私の外にあるように見える。しかし光は目に入り、電気信号になり、経験になる。その瞬間、「内側」と「外側」の線は正確にどこにあるのか？

呼吸するとき、世界はどこで終わり、私はどこで始まるのか？

完全に独立した自己は見つけがたい。

だから最初の一步は単に知的誠実さだ：分離性は経験だ。それは私が何であるかについての最終的な言葉ではないかもしれない。

境界は存在する。身体には皮膚がある。概念には定義がある。これらの境界は目的に仕える — 生存、調整、コミュニケーション。

しかし有用な境界は容易に最終的な境界と間違えられる。

細胞には膜があるが、周囲との交換を通じてのみ存在する。人には身体があるが、関係を通じてのみ存在する — 生物学的、社会的、生態学的に。

境界は存在するものを組織する。それを別種の存在に分割するのではない。

砂に線を引いても、砂が二つの異なる物質にはならない。線は実在する。砂は一つだ。

もしそれが真実なら — 現実が一つのものとして多として現れるのであって、多くのものが一であるふりをしていないなら — そこから続くのは理論ではない。修正だ。

その修正を表す言葉は統一だ。

同一性ではない。違いの消去ではない。

区別が断絶を必要としないという認識にすぎない。

これが見えたとき、世界について何を信じるかと他者をどう扱うかの間接続は、避けられないものとなる。

第2章

世界の内側の神

神が何であるかを問う前に、神がどこに置かれたかを理解することが助けになる。そしてこれを穏やかに理解すること — なぜなら多くの人にとって、神は人生で最も重要な関係だから。

以下はその関係への攻撃ではない。

一つの建築的決定と、その決定がもたらした代償の検証だ。

初期の人類史の大部分において、聖なるものは遠いものとして経験されなかった。即座のものだった。自然は生きた場 — 脅威であり、養いであり、神秘だった。

聖なるものはすべての上に持ち上げられる前に、すべてに織り込まれていた。

共同体が成長するにつれ、説明も成長した。

かつて力の生きた場として感じられたものが、ゆっくりと人格的になった。雷は神になった。豊穡は女神になった。それぞれに顔と意志が与えられた。

聖なるものに人間の顔を与えることで、世界は親しみやすくなった。

それはまた統治可能にもなった。

聖なるものが意志を持つと想像されると、命じることができた。命じることができると、従うことができた。そして従順が中心になると、関係は変わった — 参与から階層へ。

時とともに、神は上へ移動した。

神は世界の上に、彼方に、外に在るものとして理解されるようになった。

聖なるものはもはや存在に織り込まれていなかった。

存在を支配していた。

神が世界の外に置かれるとき、分断が導入される。

創造者がここに、被造物があそこに。

これは直感的に思える。陶工は壺ではない。

しかしこの類比は重要なところで崩れる。

陶工は壺から独立して存在する。

もし神がすべてが依存するもの — 究極的なもの — として理解されるなら、神は製作者と物体の関係と同じ関係で世界に対することはできない。陶工は壺から立ち去ることができる。もし神がどこにでもすべてにおいて在るなら、立ち去る先はどこにもない。

神が存在者の中の一存在者として — たとえ最高のものとしてでも — 想像されると、決定的なことが起こる。

神は一つのものになり、他のすべては別のものになる。

統一は距離に置き換えられる。

参与は従順に置き換えられる。

聖なるものはもはや存在の基盤ではなくなる。

信仰の対象になる。

—

神が外部的になると、神へのアクセスは媒介されなければならない。

神の知識はどこかから来なければならない — 聖典、教義、聖職者、伝統。

真理は発見されるのではなく伝達されるものになる。

道徳は理解されるのではなく命じられるものになる。

個人の課題は、実際に何が起きているかについての明晰さではなく、外部の意志との整合になる。

人は今や、誠実に悪意なく言うことができる：神との関係が正しいから、私の行為は正当化されると。

これは残酷さを必要としない。

確信を必要とする。

—

このシフトで本質的な何かが失われた — 意図的にではなく、構造的に。悪い人々によってではない。私たち全員によって、徐々に、何世紀もかけて。

失われたのは、存在そのものが聖であるという感覚だ。布告や信仰によってではなく、それが何であるかの力によって。

神が外部的であるとき、世界は一時的になる。

この生は参与ではなく試験になる。聖なるものは延期される — 天国へ、来世へ、裁きの日へ — 現在に認識されるのではなく。

そして聖なるものが延期されると、苦しみはより容易に許容されるようになる。誰かが残酷であることを選んだからではない。建築が静かな示唆をしたからだ：本当のものは別のところにある。

この生は一時的だ。ここでの苦しみは要点ではない。

その示唆は残酷な人々が発明したのではない。優しい人々が受け継いだのだ。そして優しい人々は、その示唆を持ちながら、ほんの少しだけ容易になったと気づいた — 苦しみを引き起こすことではなく、苦しみを見過ごすことが。自分の苦しみではない。他者の苦しみを。

これが構造的代償だ。残酷さではない。もっと静かな何か。

目を逸らす許可。



もし神が全能で、全知で、遍在するなら — 神は一体何の外にいるのか？

もしすべてを超えるものが何も存在しないなら、神をすべての外に置くことは意味をなさない。

もし神がどこにでもいるなら、神はどこか別の場所にはいない。

外部の神は攻撃される必要がない。自らの記述の重みのもとで静かに非整合的になる。

外部の神を拒否することは、すべてを死んだ物質に還元することを意味しない。それは偽の選択だ。代替案は無神論ではない。内在だ — 神が世界の内側にあること、その上ではなく。現実そのものの構造としての神。

内在は神を否定しない。

距離を否定する。

神は存在するものと分離していないと言う。支配者や裁判官として離れて立っているのではないと。

神は存在そのものと同じだ — 詩としてではなく、意味をなす最も単純な記述として。

もしこれが正しいなら、世界は神が作って放置したものではない。神が何であるかの継続的な表現だ。

そして私 — その中の意識ある存在 — は観客ではない。世界が自らを認識しつつあるものだ。

私は宇宙に到着したのではない。宇宙から生まれ出たのだ。

宇宙もまた私だ。

第3章

一つのもの、多くの形

もし世界が一つのものなら、なぜ多くのものに見えるのか？

これは正直な問いだ。もし分離性が根本的でないなら、このすべての違いは何なのか？砂漠が一つなら、砂粒はどこから来るのか？

違いを説明できない統一は無用だ。世界の明白な多様性を否定する見方は、理解を深めない。理解を放棄する。

課題は多様性、個性、区別を否定することではない。それらがどのように生じるか — そしてそれらが実際に何を教えているか — を理解することだ。

砂漠を考えてみよう。

それは実在する。立つことができる。横断することができる。しかしそれは何でできているのか？

砂粒、熱、風、時間、そしてそれらの間の関係。

砂漠は砂の上に浮かぶ余分なものではない。

全体が形成するパターンだ。

各粒は区別される。各粒には位置、形、歴史がある。それを生み出した砂漠から離れて存在する粒はない。

粒は実在する。砂漠は実在する。

それらの間の分離は実在しない。

間違いは粒に気づくことではない。

間違いは粒が砂漠から離れて存在すると結論づけることだ。

統一は同一を意味しない。

二人は表現において完全に異なりながら、同じ基盤を共有できる。

気質、能力、信念、文化、境遇 — これらは無限に変化する。これらの変化は解決すべき問題ではない。世界が形を通じて自らを表現する仕方だ。

統一が否定するのは違いではなく、絶対的な孤立だ。

区別されることと分離していることの間には線がある。区別された形は一つの過程に属する。分離した実体はそうではない。

人は限定されている。

これは議論の余地がない。各人は特定の場所と時間に存在する。限られた知識、限られた力、限られた寿命を持つ。全体を見る者はいない。

しかし限定は無意味を意味しない。

一つの言葉が人生を変えうる。一つの優しさの行為が一日、一年、一家族の方向を変えうる。

形において特定のことは、価値において劣ることではない。全体がそれ自体ではできない一つのこと — ここから、この角度から、この特定の目を通して自らを見ること — ができるということだ。

波は海を所有しない。しかし海から分離してもいない。

人は世界を、真理を、神を所有しない。

認識は全体に対する権威を与えない。全体の中での参与を与える。

誰も中心には立たない。すべての人が参与する。そして参与は劣った役割ではない。

存在する唯一の役割だ。

もしすべての意識ある存在が同じ全体の表現なら、平等は政策ではない。私が何であるかについての事実だ。

この平等は知性、道徳性、信仰、行動に依存しない。それらすべての前に来る。

誰も他の誰よりも源に近くはない。

建物のどの窓も太陽のより良い眺めを持たない。

—

ここまで読んだことで、あなたはすでに選択をした。あなたの中の何かが読み続けることを選んだ。命じられたからではない。何かが共鳴し、あなたが応答したからだ。

その応答 — 考慮し、秤量し、調整する能力 — がこれまで存在した唯一の自由だ。そしてそれで十分だ。

自由は無限の選択ではない。応答性だ。

坂を転がり落ちる岩に選択はない。重力に従う。坂を歩いて下る人は止まり、振り返り、座り、方向を変えることができる。物理学から自由だからではない。反省するからだ。考慮する。応答する。

選択は原因からの自由ではない。

原因がどのように取り上げられ表現されるかを形作る能力だ。

—

つながった世界において、力は決して孤立して保持されない。

私の行動は私自身以上に触れるがゆえに、責任は消えるのではなく深まる。

統一は害を免罪しない。害がなぜ封じ込められないかを説明する。一つの部屋で下された決定が別の部屋の扉を閉じうる。比喩ではなく。文字通り。

道徳的成長はますます厳しい規則への従順ではない。明晰さの漸進的増大だ。

理解が深まるにつれ、行動は調整される。

害を正当化することは困難になる — 禁じられているからではなく、世界について理解していることともはや整合しないからだ。

あらゆる状況のための新しい規則は必要ない。より明晰な洞察が必要だ。残りは従う。

第4章

なぜ優しさは構造的なのか

この時点で、基盤は移動した。

いかなる命令も発せられていない。いかなる権威も援用されていない。いかなる恐怖も報酬も訴えられていない。

検証されたのは、分離性がもはや最終的真実として扱われないとき、世界がどのように見えるかだ。

この章はそこから続く結論を導く。

あなたがすでに感じている結論だ。押しつけられる必要はない。ただ明確に言われる必要がある。

もし世界が一つのものであり、意識ある存在がその一つのものであり、行動が共有された場を通じて伝わるなら — 慈悲は道徳的選好ではない。

正確に理解された世界に対する最も明晰な応答だ。

—

ほとんどの道徳体系は規則から始まる。

これをせよ。あれをするな。この権威に従え。この罰を避けよ。

規則は行動を規制できる。理解を変えることは稀だ。

規則は機械的に従い、戦略的に抵抗し、不便なときに無視できる。

理解は異なる仕方で機能する。

状況が明晰に理解されると、特定の行動は単に意味をなさなくなる。火に手を入れるのを止めるために規則は必要ない。火の性質で十分だ。

慈悲は同じように機能する。

命じられるのではない。明晰に見ることから従う。

もし相手が根本的に私と分離しているなら、害は合理化できる。秤量し、正当化し、先延ばしし、外部委託できる。戦略的判断になる。

しかしもし相手が本質において分離していないなら — 私と彼らが同じ世界の表現なら — 害は戦略ではない。混乱だ。私が何に作用しているかの誤読だ。

同じ世界を共有しながら他者を害することは、左手が右手を攻撃するようなものだ。手は分離して感じられる。身体は一つだ。損傷は局所にとどまらない。打つ手と打たれる手は同じ血液供給、同じ神経系、同じ痛みを共有する。

打撃は皮膚の両側に着地する。

残酷さは高くつく。道徳的にだけではない。構造的に。

信頼を破壊する。対立をエスカレートさせる。苦しみを増殖させる。

対照的に、優しさは効率的だ。低摩擦の行動だ。

抵抗を減らす。システムを安定させる。あなたと私を含む全員が機能できる条件を保全する。

これは感傷ではない。観察だ。

人々がそれを引き裂いていないとき、世界はよりよく機能する。

慈悲はしばしば弱さと誤解される。物事を放置すること。害を容認すること。

ここでは、慈悲はまったく別のものだ。

行動に適用された明晰さだ。

好意を必要としない。同意を必要としない。認識を必要とする。

相手が私とあなたを含む世界の外にいないという認識。

外科医は治すために切る。親は守るためにいけないと言う。

慈悲は境界を排除しない。境界に情報を与える。

—

今読んだすべては単なる哲学ではない。導出されたものだ。

今読んだすべては単なる哲学ではない。導出されたものだ。

この本の背後には、ここで述べられたすべてを一つの前提から、四つの公理を通じて、光がどう進み原子がどう結合するかを記述するのと同じ数学を使って導出する形式的作業体がある。

前提は：一つの記録が存在する。

前提は：一つの記録が存在する。

試してみよ。言え：何も存在しない。

その文はたいしたことがないように聞こえる。何かの基盤になるには単純すぎるように聞こえる。しかしそれは、否定すればそれ自体が真であることを証明してしまう、言語のすべての中で唯一の文だ。

試してみよ。何も存在しないと云え。

それを言うには、話者が必要だ。瞬間が必要だ。言語が必要だ。思考が必要だ。これらの各々は記録だ。否定が証明だ。「何も存在しない」という文はそれ自体が何かであり — その何かは記録だ。

それを言うには、話者が必要だ。瞬間が必要だ。言語が必要だ。思考が必要だ。これらの各々は記録だ。否定が証明だ。「何も存在しない」という文はそれ自体が何かであり — その何かは記録だ。

これはトリックではない。論理的な床だ。

From this one premise — the only premise that cannot be false — the formal work derives four axioms. From those axioms, it derives physical constants and a terminal ethic. The physics and the ethics come from the same place. They are not neighbours. They are siblings. The full derivation is walked through in Chapter 12. The formal work is called The 420 Code, and it is free, forever, at the420code.org.

—

前提は信仰を必要としない。何か — 何であれ — が起きていることだけを必要とする。

前提は信仰を必要としない。何か — 何であれ — が起きていることだけを必要とする。

そして何かが起きている。あなたはこの文を読んでいる。それが記録だ。

そして何かが起きている。あなたはこの文を読んでいる。それが記録だ。

この一つの前提 — 偽でありえない唯一の前提 — から、形式的作業は四つの公理を導出する。

四つの公理から、光の速度、重力定数、電子の質量、そして終端倫理を導出する。

四つの公理から、光の速度、重力定数、電子の質量、そして終端倫理を導出する。

物理学と倫理学は同じ場所から来る。隣人ではない。兄弟だ。

この導出は検証され、公開され、それが失敗する 258 の具体的条件が装備されている。

この導出は検証され、公開され、それが失敗する 258 の具体的条件が装備されている。

It is called The 420 Code, and it is free, forever, at the420code.org.

It is called The 420 Code, and it is free, forever, at the420code.org.

—

すべての意識ある存在が一つのものの表現であるという主張は、この本の最も露出した主張だ。

しかし倫理はそれとともに崩壊しない。

形而上学を必要としない。二つのことだけを必要とし、両方とも測定可能だ。

第一：私の生はあなたの生に影響し、あなたの生は私の生に影響する。私たちは結合している。第二：ドリフトは不可逆だ。

この二つの事実だけから — 統一の主張なし、窓なし、建物なし — 同じ幾何学が同じ結果を生む。

それが測るのはあなたの効果だ。

—

これが地盤だ。

すべての人は回廊を持つ — 今立っている場所からまだ到達可能な未来の集合。

すべての人は回廊を持つ — 今立っている場所からまだ到達可能な未来の集合。

すべての人は回廊を持つ — 今立っている場所からまだ到達可能な未来の集合。

回廊はそれ自体で狭まる。ドリフトが既定値だ。

回廊はそれ自体で狭まる。ドリフトが既定値だ。

回廊はそれ自体で狭まる。ドリフトが既定値だ。

そして二人が連結しているとき、協力することが両者の空間を拡張する。

そして二人が連結しているとき、協力することが両者の空間を拡張する。

第二部

優しさは両方の回廊を開いておく行動だ。

優しさは両方の回廊を開いておく行動だ。

第5章

優しさは両方の回廊を開いておく行動だ。

幾何学はあなたの意図に関心がない。

幾何学はあなたの意図に関心がない。

幾何学はあなたの意図に関心がない。

答えは二つしかない。二つだけだ。他の答えが好みで排除されたからではなく、問い自体が可能な答えの集合を二つに限定するからだ。

規則は変わらない現実の構造から導かれるか——測定可能で、検証可能で、反証可能な真実から——それとも別のどこかから来るかのどちらかだ。

あなたの効果を測定する。

その権威が解釈に依存するいかなるシステムも、解釈がどれほど洗練されていようと、第二のカテゴリーに属する。

—

一つのもの、多として現れる。砂漠の砂粒。海の波。唯一の安定的行動としての優しさ。命令ではなく明晰さとしての慈悲。

そしてここに、基盤があなたに問うことを強いる問いがある。

何かが間違った。何かが基盤を取り、その上に戦場を築いた。何かが選別を聖別した。何かが内側と外側を区別するという身体の有用な習慣を取り、それに神の重みを与えた。

屋根。そして刃。

制約は現実そのものの不変の構造から来る。規則は押し付けられるのではない。読み取られるのだ。

建築

誰が何を、いつ、どのような代償で行うかについての合意なしに、共有空間は劣化する。協力は規則を必要とする。規則は源を必要とする。

可能な答えは二つだ。二つだけ。他の答えが好みによって排除されたからではなく、問いそのものが二値だからだ。

主張された権威。宣言された源。テキスト、伝統、啓示。

建築 A は権威に基づく倫理だ。

制約は現実そのものの外部にある権威から来る。

神が宣言する。預言者が書き写す。テキストが保存する。制度が解釈する。規則は現実の構造から導出されない。現実には課される。

風と同じ周波数で振動する橋は自壊する——鋼がどれほど強くても。鋼のせいではない。共振のせいだ。

光の速度は命じられない。終端倫理は命じられない。

両方とも同じ公理が同じ現実には作用した帰結だ。

この二値は主張ではない。正しいことと間違っていることを言う権威がどこに由来するかという問いから導出される。

答えは完全だ：変化できない構造からか、それ以外の何かからか。

建築 **A** は不安定だ。

不安定性は建築そのものの帰結だ。

風と同じ周波数で振動する橋は、鋼鉄がいかに強くても自壊する。鋼鉄が問題ではない。周波数が問題だ。建築が周波数だ。

不安定性は五つの段階で展開する。

各段階は前の段階から従う。

ただしこの連鎖は崩壊を強制する。

段階 1：宣言

出来事は歴史的で、単一で、反復不可能だ。

再実行できない。検証できない。反証できない。

これが最初の構造的欠陥だ：検証できない倫理的基盤は、修正できない倫理的基盤だ。

段階 2：転写

段階 2：転写

権威の出力が記録される。石板。巻物。書物。

権威の出力が記録される。石板。巻物。書物。

記録は人間の代理人によって行われる — そのすべてがノイズを導入する。不正直ではない。ノイズ。信号は有限帯域幅のチャンネルを通過する。

記録は人間の代理人によって行われる — そのすべてがノイズを導入する。不正直ではない。ノイズ。信号は有限帯域幅のチャンネルを通過する。

残るのは人間の産物 — 人間の言語で書かれ、人間の文脈で形作られ、人間の限界を持つ — でありながら神の起源を主張するもの。主張は検証できない。なぜなら元の信号が比較のために利用できないから。

残るのは人間の産物 — 人間の言語で書かれ、人間の文脈で形作られ、人間の限界を持つ — でありながら神の起源を主張するもの。主張は検証できない。なぜなら元の信号が比較のために利用できないから。

段階 3：解釈

テキストは「汝殺すなかれ」と言う。

千年の注釈が問う：誰を殺すな？いつ？戦争の敵を？異端者を？胎児を？末期の病人を？

テキストは答えない。テキストは有限で、状況は有限ではないから。

解釈がその隙間を埋める。解釈は分裂する。分裂しなければならない。

その相反は解釈者の失敗ではない。建築によって生み出される数学的必然だ。

—

段階 4：分裂

各々が元の宣言への忠実さを主張する。各々が相手を歪曲と非難する。

主張は解決できない。なぜなら各々が絶対 — 交渉しない神、更新されないテキスト、繰り返されない啓示 — から導出されるから。

建築は二つの集団を生み出した。各々が自分たちが正しいと確信し、各々が相手が間違っていると確信し、一方の集団が存在を止める以外に不一致を解消する機構を与えていない。

—

アーキテクチャ Bはこの連鎖を生み出せない。その基盤が異なる行為者によって異なる解釈をされることがないからだ。公理には解釈の余地がない。テスト条件があるだけだ。

公理は検証されるものであり、信じるものではない。258の緊急停止装置を持つ — 各々が明示的で、宣言された、反証可能な条件であり、その条件の下で主張は自己破壊する。

段階 5：崩壊

形式的研究はテンション場の特定の方程式を導出する — 物質を結合させる構造だ。緊急停止装置は言う：この方程式が測定された強い核力と一致しなければ、導出は崩壊する。

有限の資源を持つ共有世界における競合する絶対は暴力を生む。欠陥としてではない。帰結として。

もう一つある。

有限の資源を持つ共有世界における競合する絶対は暴力を生む。欠陥としてではない。帰結として。

丘の頂上のボールが転がり落ちなければならないのと同じように、競合する絶対は問題の形によって暴力へと強制される — 両方が正しくありえない二つの集団が、同じ土地に住んでいる。

丘の頂上のボールが転がり落ちなければならないのと同じように、競合する絶対は問題の形によって暴力へと強制される — 両方が正しくありえない二つの集団が、同じ土地に住んでいる。

時間軸は変わる — 数世紀、数十年、時に数年。結果は変わらない。足場は落ちる。常に落ちてきた。今も落ちている。そして落ちるとき、その下にいる人々の上に落ちる。

時間軸は変わる — 数世紀、数十年、時に数年。結果は変わらない。足場は落ちる。常に落ちてきた。今も落ちている。そして落ちるとき、その下にいる人々の上に落ちる。

時間軸は変わる — 数世紀、数十年、時に数年。結果は変わらない。足場は落ちる。常に落ちてきた。今も落ちている。そして落ちるとき、その下にいる人々の上に落ちる。

これが構造的差異だ。これが唯一重要な構造的差異だ。

—

建築 B はこの性質を持たない。公理は曖昧ではないから解釈できない。光の速度は注釈の伝統を必要としない。終端倫理は教皇を必要としない。

公理は信じられるのではなく、検証される。258 のキル・スイッチを持つ — 各々がそれが死ぬ明示的で、宣言された、反証可能な条件だ。

キル・スイッチとはどのようなものか？ここに一つある。

形式的作業は張力場 — 物質を結合させる構造 — の特定の方程式を導出する。キル・スイッチは述べる：もし方程式が実際の場の測定された振る舞いと一致しなければ、主張は死ぬ。修正されない。再解釈されない。死ぬ。

方程式は検証された。一致した。キル・スイッチは閉じた — 誰かがそれを閉じたと宣言したからではなく、数学が測定に照らして確認されたから。

もう一つある。

形式的作業は宇宙最古の光 — 宇宙マイクロ波背景放射 — の特定のパターンを予測する。そのキル・スイッチはまだ生きている。予測はまだデータに照らして検証されていない。もしデータが予測と矛盾すれば、主張は死ぬ。システムはデータと交渉しない。

キル・スイッチは免責条項ではない。主張が自壊する具体的で、宣言された、測定可能な条件だ。歴史上のいかなる聖典もそれを公開したことがない。

第6章

テキストの中の刃

倫理が測定可能な物理学を導出するのと同じ形式的構造から導出されるとき、倫理は同じ検証可能性を受け継ぐ。建築Aと建築Bの違いは確信ではない。機構だ。建築Aは言う：これを信じよ、疑えばそれは罪だ。建築Bは言う：これを検証せよ、失敗すればそれは間違いだった。

誤りを認められるシステムは誤りを修正できる。誤りを認められないシステムはエスカレートすることしかできない。

それが構造的差異だ。それが重要な唯一の構造的差異だ。

—

トラー

各々は究極的に、異なる行為者によって異なって解釈されうる主張に依存する。

十分な圧力の下では、同じ強制連鎖が作動する。

ジャコバン派は社会契約論を使った。ソヴィエトは主張された歴史科学を使った。機構は同じだった。必要な圧力はより低かった。文化的接着が弱かったからだ。しかし脆弱性は同一だった：解釈可能な権威はいずれ対立する方向に解釈される。絶対の対立する解釈は暴力を生む。

"あなたの神、主があなたを導き入れ、あなたが所有しようとする地に入るとき、多くの民をあなたの前から追い払われる——あなたは彼らを完全に滅ぼさなければならない。彼らと契約を結んではならず、彼らに慈悲を示してはならない。" 申命記 7:1-2。

"今行って、アマレク人を撃ち、そのすべてのものを聖絶せよ。彼らを容赦するな。男も女も、子供も乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺せ。" サムエル記上 15:3。

以下が証拠だ。要点は暴力的な節が存在することではない。要点は、建築が愛と暴力を同じページに、同じ主張された神の権威の下に置き、どちらの読みが正しいか

を判定する構造的機構を提供しなかったことだ。両方の読みはテキストに忠実だ。テキストが両方を含むから。

トラー

“汝の隣人を汝自身のごとく愛せよ。”レビ記 19:18。

同じ書。同じ主張された著者。同じ神：

“男がもし女と寝るように男と寝るならば、両者は忌むべきことを行ったのである。必ず殺されなければならない。”レビ記 20:13。

“あなたの神、主が、あなたの入って行って所有しようとしている地に、あなたを連れて行き、多くの国々をあなたの前から追い払うとき、あなたはそれらを全滅させなければならない。彼らと契約を結んではならず、彼らをあわれんではならない。”申命記 7:1-2。

“今、行って、アマレク人を撃ち、そのすべての持ち物を全滅させよ。彼らを容赦してはならない。男も女も、子供も乳飲み子も殺せ。”サムエル記上 15:3。

完全な記録は第 8 章に属する。

新約聖書

新約聖書

“あなたの敵を愛し、あなたを迫害する者のために祈れ。”マタイ 5:44。

同じ聖書。同じ伝統：

“私が地に平和をもたらすために来たと思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。”マタイ 10:34。

“私が地に平和をもたらすために来たと思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。”マタイ 10:34。

そして十九世紀の反ユダヤ主義の種を蒔いた節：“あなたたちは悪魔である父から出た者であって、その父の望みどおりにしたいと思っている。彼は初めから人殺しであった。”ヨハネ 8:44 — イエスがユダヤ人の一団に向かって語った言葉。

それが欠陥だ。

完全な記録は第 8 章に属する。

完全な記録は第 8 章に属する。

クルアーン

“宗教に強制があってはならない。”クルアーン 2:256。

同じ書。同じ主張された啓示。同じ神：

“彼らを見つけた所で殺せ。”クルアーン 2:191。

“アッラーを信じない者と戦え、彼らが進んで服従してジズヤを納め、自らを卑下するまで。”クルアーン 9:29。

“聖なる月が過ぎたなら、多神教徒を見つけた所で殺し、捕らえ、包囲し、あらゆる待ち伏せの場所で彼らを待ち伏せよ。”クルアーン 9:5。

強制なし — そして彼らを見つけた所で殺せ。同じ書。同じ神。解釈者が選ぶ。

テキストにはギーターの超越性もマヌ法典の序列制度も含まれている。改革者は前者を読む。抑圧者は後者を読む。どちらもテキストに忠実だ。

アーキテクチャはフィルターしない。同じ権威の下に両方を保持する——超越と序列、解放と檻を。

建築が。

ヒンドゥー聖典

バガヴァッド・ギーター、第2章、第19節：“殺すと思う者も、殺されると思う者も、真実を知らない。自己は殺さず、殺されることもない。”魂の永遠の性質に基づく非暴力の教え。

同じ伝統。同じ聖典の権威：

マヌスクリティ — マヌの法典 — ヒンドゥー史上最も影響力のある法的テキストは、カースト制度を神に定められたものとして確立する。

彼らは動物のようだった。殺戮は罪ではなかった。

ダリット — “不可触民” — はこのシステムの下にさえ置かれた。生まれながらに穢れた者。共有の井戸から水を汲むことを禁じられた。寺院に入ることを禁じられた。上位カーストと同じ道を歩くことを禁じられた。彼らの影は汚染と見なされた。

何億もの人間が、何千年にもわたって、神の起源を主張するテキストによって永続的な従属に選別された。

テキストはギーターの超越とマヌスクリティの階層の両方を含む。改革者は一方を読む。抑圧者は他方を読む。両方の読みは伝統に忠実だ。

建築はフィルタリングしない。超越と階層、解放と檻の両方を — 同じ権威の下に、同じ柵に、神の真理への同じ主張とともに — 保持する。読者が選ぶ。テキストは両方の選択を許す。

それが欠陥だ。

—

愛の聖句は実在する。慈悲は実在する。あらゆる伝統において何百万もの信仰者が愛の聖句に従って生き、一切の害を与えない。それは問題ではない。

同じ伝統。同じ聖典の権威：

マハーヴァンサー — スリランカの“大年代記” — 上座部仏教の基本テキストは、紀元前2世紀のドゥッタガーマニー王によるタミル・ヒンドゥー教徒の虐殺を記録し、それをダルマ擁護のための正当な行為として梓づける。王が殺害への悔恨を表明したとき、僧侶たちは彼を慰めた：死者は正しい見解を持たなかったから完全な人間ではなかった、と。

これはあらゆる伝統が行う同じ構造的動きだ：内集団の聖別、外集団の非人間化、暴力への道徳的許可。

それらはアーキテクチャによってそこに置かれた——人間の世紀に人間の限界を持つ人間の行為者によって行われた、主張された神の信号の人間による書き写しの過程によって。

ミャンマーで、2017年、仏教僧アシン・ウィラトウー自らを“ビルマのビン・ラディン”と呼んだ——は、ロヒンギャ・ムスリムに対する暴力を扇動するために聖典の権威を使った。僧侶たちはパンフレットを配布した。僧侶たちは民族浄化を呼びかける説教をした。

いかなる宗教も例外ではない。建築はそのすべてにわたって作動する。

—

あらゆる宗教のあらゆる改革運動は愛の聖句を読み暴力の聖句を無視しようとした。あらゆる原理主義運動は暴力の聖句を読み愛の聖句を無視しようとした。

愛の節は実在する。慈悲は実在する。あらゆる伝統で何百万もの宗教的な人々が愛の節によって生き、暴力に触れることはない。この章はそれを否定しない。

この章は言う：建築は愛と暴力の両方を同じページに、同じ権威の下に、同じ主張された神の起源とともに置いた。あらゆる伝統において。例外なく。

この章は言う：建築は愛と暴力の両方を同じページに、同じ権威の下に、同じ主張された神の起源とともに置いた。あらゆる伝統において。例外なく。

この章は言う：建築は愛と暴力の両方を同じページに、同じ権威の下に、同じ主張された神の起源とともに置いた。あらゆる伝統において。例外なく。

次の章がその手を描写する。

第7章

爆発物はテキストの中にある。常にテキストの中にあった。

爆発物はテキストの中にある。常にテキストの中にあった。

建築によってそこに置かれた — 主張された神の信号の人間による転写の過程によって、人間の憎悪を持つ人間の手によって何世紀にもわたって行われ、それらを除去する構造的機構を欠く制度によって保存された。

なぜなら、それらを除去するにはテキストが人間の産物であると認めることが必要だから。そしてテキストが人間の産物であると認めれば、テキストが神であることに依存する足場の権威が崩壊するから。

なぜなら、それらを除去するにはテキストが人間の産物であると認めることが必要だから。そしてテキストが人間の産物であると認めれば、テキストが神であることに依存する足場の権威が崩壊するから。

なぜなら、それらを除去するにはテキストが人間の産物であると認めることが必要だから。そしてテキストが人間の産物であると認めれば、テキストが神であることに依存する足場の権威が崩壊するから。

足場は刃を除去できない。なぜなら刃を除去すれば足場が死ぬから。

理論ではない。歴史だ。

—

操作 1：アイデンティティの融合

両方の運動はテキストに忠実だ。テキストが両方を含むから。

穏健派と原理主義者の間の論争は、誰が正しく読んでいるかについての論争ではない。両方が正しく読んでいる。

テキストは刃を含む。しかし引き出しの中の刃は休眠している。何かがそれを拾わなければならない。何かがそれを振るわなければならない。

次の章がその手を記述する。

第7章 機構五つの段階は建築の不安定性を記述する。

この章は機構を記述する — 足場が身体の内側と外側を選別する習慣を文明的暴力に変える操作的過程を。

選別は生物学的だ。すべての人間の身体は線を引く：内側、外側。自己、他者。この習慣はあらゆる足場に数十万年先行する。この習慣は足場の発明ではない。

他者は単に異なるだけでなく宇宙的に異なるものになる — 神の目において異なり、根底まで異なる。

以下は七つの作動だ。各々が観察可能。各々が文書化されている。各々がすべての主要宗教に存在する。各々がここで具体的な、名前のある出来事で実証される。

足場は、人が手放せないもの——自らのアイデンティティ感覚——と自身を融合させることで、自らを疑問の余地のないものにする。

—

作動 1：アイデンティティの融合

足場は宗教的アイデンティティと個人のアイデンティティを融合させる。

あなたはイスラームを実践する人ではない。あなたはムスリムだ。

あなたは教会に通う人ではない。あなたはキリスト教徒だ。

アイデンティティは全てを包含する。他のすべてのアイデンティティ — 国籍、職業、家族、人類性 — を従属させる。

実証：サルマン・ラシュディは

マサチューセッツに到着した清教徒の入植者たちは、新しいエルサレムを建設していると信じていた——神に選ばれ、神のを 1988 年に出版した。アヤトッラー・ホメイニーは彼の死を求めるファトワーを発した。

小説は、議論し、批評し、無視できる文学作品としてではなく、すべてのムスリムの自己への攻撃として扱われた。

書店が爆破された。翻訳者が刺された。日本語翻訳者の五十嵐一は 1991 年に殺害された。

小説。フィクション作品。足場が信仰と自己を完全に融合させたために、物語が攻撃のように感じられ、存在的脅威として扱われた。

アイデンティティが融合すると、批判は攻撃になる。疑問は冒涇になる。

それはその帰結だった。

作動 2：内集団の聖別

選ばれた民。ウンマ — 世界的ムスリム家族。キリストの体。会員であることは契約ではない。あなたが何であるかについての主張だ。

内集団のメンバーは単に所属するのではない。所属される — 神に主張され、神に印され、究極の権威の目に特別だ。

実証：マニフェスト・デスティニーの教義。神に大陸横断の拡大を選ばれたキリスト教国家としてのアメリカ合衆国。

この語は 1845 年にジャーナリストのジョン・オサリヴァンを通じて公の言説に入ったが、神学はそれより二世紀先行していた。

恵みの証として世界に見える。その信念は決して去らなかった。国家の建国神話になった：神の新しいイスラエルとしてのアメリカ。聖別された民。命じられた使命。

北米の先住民は単に邪魔だただけではない。彼らは契約の外にいた。彼らの土地は単に欲しがられていただけではない。約束されていた — イスラエルの民にカナンを約束したのと同じ神によって。

神学が奪取を盗みではなく従順のように感じさせた。

内集団の聖別が領土拡張を神の使命に変換した。

その帰結だった。

作動 3：外集団の標識

足場は外集団を構造的に劣等と標識する。

異教徒。カーフィル。異端者。ゲンティール。背教者。不可触民。これらの用語は意見の相違を記述しない。地位の相違を記述する — 究極の権威との劣った関係。

外集団は単に間違っているのではない。神自身が宣言した仕方間違っている。標識は社会的ではない。標識は宇宙的だ。

実証：カースト制度とダリット。

何億もの人間が、何千年にもわたって、生まれながらに永久に汚染された者として標識された。彼らの影が汚染する。彼らの接触が汚染する。彼らの存在が汚染する。

2014年、インドのタミル・ナドゥ州で、イラヴァラサンという名のダリットの青年が、彼の異カースト間結婚が暴徒の暴力を引き起こし村全体が破壊された後に死体で発見された。

法律は変わった。標識は変わらなかった。なぜなら標識は法的ではなかったから。宇宙的だった。

テキストの中にあった。

建築によって聖別されていた。

—

作動 4：道徳的許可

足場は、内集団内では禁じられるであろう外集団に対する行動への道徳的許可を提供する。道徳の境界と集団の境界が融合する。

外集団に対する暴力は倫理システムの違反ではない。その適用だ。

足場は人の道徳感覚を克服する必要がない。足場はそれを方向転換する。

神のために殺す人は自分が善いことをしていると信じている。それが機構の力だ。道徳を抑圧しない。乗っ取る。

実証：バルーフ・ゴールドスタインは、アメリカ系イスラエル人の医師で、1994年2月25日にヘブロン¹の族長たちの洞窟に入り、ラマダンの祈りの最中のムスリム礼拝者に発砲した。29人を殺害し125人を負傷させた後、生存者によって殴り殺された。

ゴールドスタインは医師だった。ヒポクラテスの誓いを立てていた。生命を守ることに職業人生を捧げていた。足場が、彼の持つすべての職業的・人間的本能を無効にする道徳的許可を提供した。

彼の墓は巡礼地になった。碑文にはこう書かれていた：“清い手と純粋な心。”大量殺人犯の墓に、道徳的純粋さの言葉が刻まれた。

足場は道徳を抑圧しない。

足場は道徳を乗っ取る。

—

作動 **5** : 来世のてこ

足場は従順に報酬を、離反に罰を約束する — この生においてではなく（ここでは約束が検証できるから）、来世において（ここでは検証できない）。

てこは無限であり検証不可能だ。決して確認できない無限のインセンティブはいかなる行動も動機づけうる。いかなる行動も。

実証：イラン・イラク戦争、1980-1988。

イラン政権は子供たちにプラスチックの鍵を配った — 物理的で、触れる、プラスチックの鍵 — そして天国の門を開くと告げた。そして進軍する兵士の道を開くために子供たちを地雷原を歩いて渡らせた。

子供たちはヘッドバンドを受け取った。ヘッドバンドには‘神の戦士’と書かれていた。12歳ほどの子供もいた。

子供たちはヘッドバンドを受け取った。ヘッドバンドには‘神の戦士’と書かれていた。12歳ほどの子供もいた。

子供たちは、信頼するすべての大人 — 母親、教師、ムッラー — が向こう側で待っているものは残していくものより良いと言ったから地雷原に歩いて行った。母親たちは自分たちもそう信じていたから行かせた。

これは関わった人々の失敗ではない。母親たちは怪物ではなかった。子供たちは愚かではなかった。建築が提供した枠組みの中で合理的に行動していた。

無限の報酬 — 永遠の楽園 — 有限の行為の代わりに — 前に歩くこと。数学は圧倒的だ。いかなる世俗的な費用便益計算も永遠と競争できない。

それが全力で作動する建築だ。

—

作動 6：認識論的閉鎖 — システムが自らを修正から封じる

足場はループを閉じる。疑いは罪だ。疑問は信仰の欠如だ。足場に対する証拠は神からの試練だ。

足場はループを閉じる。疑いは罪だ。疑問は信仰の欠如だ。足場に対する証拠は神からの試練だ。建築は修正を逸脱として定義することで、自らを修正から免疫化する。

疑いを罪として扱うシステムは、自らが間違っているという証拠を処理できない。

自らが間違っているという証拠を処理できないシステムは更新できない。

更新できないシステムは硬直化することしかできない。

更新できないシステムは硬直化することしかできない。

実証：ジョルダノ・ブルーノ、ドミニコ会修道士、哲学者、数学者。

彼は星が独自の惑星を持つ遠い太陽であると提唱した。無限の宇宙を提唱した。地球が創造の中心ではないと提唱した。

その慣習は何世紀にもわたって続いた。

猿轡が詳細だ。足場は彼を単に殺しただけではない。まず沈黙させた。彼の言葉が群衆に届くことを許すことができなかった。足場を疑問視する言葉は、体を脅かす炎よりも危険だから。

猿轡が詳細だ。足場は彼を単に殺しただけではない。まず沈黙させた。彼の言葉が群衆に届くことを許すことができなかった。足場を疑問視する言葉は、体を脅かす炎よりも危険だから。

猿轡は作動6の物理化だ：建築が正直な探究を、探究者を破壊し探究を同時に沈黙させることで自らを封じている。

—

作動7：家父長制建築

テキストは男性によって書かれ、男性によって写され、男性によって解釈され、男性が制度的権力を持つ社会においてなされた。

理論ではない。抽象ではない。

歴史。身体。

七つの操作。アイデンティティの融合——足場と自己の融合。内集団の聖化——選民、ウンマ、キリストの体。外集団の標識——異教徒、カーフィル、邪教徒、異端者。道徳的許可——暴力を服従として再定義。来世の梃子——無限の報酬、無限の罰、検証不能。封印された回路——疑いは罪。家父長的アーキテクチャー——男性の権威を神が認可。

七つの歯車。すべて噛み合い。すべて回転。

女性は婚礼の衣装を着せられた。夫の遺体の横の薪の上に置かれた。火がつけられた。

第8章

記録

焼身した女性は女神として崇拜された。その場所に寺院が建てられた。焼身は罰ではなかった。名誉だった。

それが作動7を作動7たらしめたものだ：足場は単に女性の破壊を許しただけではない。足場は破壊を聖にした。女性の価値は夫から完全に導出されていたので、夫が死ぬと女性は構造的に無になった。

この慣行は何世紀も続いた。

イギリス植民地行政は1829年にそれを禁止した。ヒンドゥー改革者たちはそれ以前に何十年も反対運動をしていた。しかしサティはインドの一部で20世紀にまで存続した。

第8章で述べられるマグダレン洗濯所は、異なる伝統における同じ作動だ。完全な記録はそちらに属する。

作動7は単に女性に従属させるだけではない。その子供に従属させる。身体そのものを従属させる。

古代

キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教に存在する — 異なる形で、異なる強度で、異なる時代に、しかし構造的に存在する。ここで名前のある人物、名前のある出来事で実証されている。

キリスト教徒は闘技場でライオンに投げ込まれた。ネロの庭園で人間の松明として生きたまま焼かれた — その体はピッチに浸され、皇帝の夜会を照らすために火をつけられた。

メカニズムは単純だった：外集団の標識。道徳的許可。キリスト教徒は異なっていた。ゆえにキリスト教徒は消耗品だった。

足場が身体を選別の習慣を文明的暴力に変換する機構。

七つの歯車。すべて噛み合い。すべて回転し。

すべてが同じ出力を生産する：地面の上の屍。

西暦 415 年、エジプトのアレクサンドリアで、キリスト教徒の群衆が哲学者ヒュパティアを馬車から引きずり出した。

以下は建築 A が暴力に崩壊した歴史的記録だ。

推定値は学術的出典から引かれている。推定値が分岐する場合は範囲が示される。帰属が争われる場合は争いが記される。

この章は、列挙されたすべての紛争の唯一の原因が宗教であるとは主張しない。

宗教が暴力が組織された線 — 誰が内側で誰が外側か、誰が生き誰が死ぬかを決定した選別機構 — を提供したと主張する。

アーキテクチャは手を変えた。

この章の声は論証ではない。算術だ。数字が語る。

—

古代

三世紀にわたり、ローマ帝国はキリスト教徒を迫害した。数字は議論されている。推定値は死者 1 万人から 10 万人に及ぶ。

機構は単純だった：外集団の標識。道徳的許可。キリスト教徒は異なっていた。したがってキリスト教徒は使い捨てだった。

そして足場は手を変えた。

紀元 312 年、皇帝コンスタンティヌスがキリスト教に改宗した。一世代の間に — 一つの生涯の間に — 迫害された者が迫害する者になった。

紀元 415 年、エジプトのアレクサンドリアで、キリスト教の暴徒が哲学者ヒュパティアを馬車から引きずり出した。

ヒュパティアは数学者だった。天文学者だった。教師だった。古代図書館 — 七世紀にわたって人類の知識を保存してきた機関 — の最後の偉大な知性だった。

暴徒は彼女を裸にした。屋根瓦と牡蠣の殻で生きたまま皮を剥いだ。遺体を焼いた。

彼女は信じていることのために殺されたのではない。彼女が何を代表していたかのために殺された：足場の外で作動する精神。

機構は同一だった。アイデンティティの融合。内集団の聖別。外集団の標識。道徳的許可。

建築は変わらなかった。



イスラームの征服

第一回十字軍は 1099 年 6 月 7 日にエルサレムに到達した。三年の旅と数千キロの行程の後だった。十字軍兵士は衣服に十字を縫い付けていた。キリストのために聖地を奪還することを誓っていた。

ムハンマドの死後一世紀以内に、イスラーム帝国はアラビア半島から西はスペイン、北アフリカ、ペルシア、東は中央アジアまで拡大した。歴史上最も急速な領土拡大の一つだった。

ムハンマドの死後一世紀以内に、イスラーム帝国はアラビア半島から西はスペイン、北アフリカ、ペルシア、東は中央アジアまで拡大した。歴史上最も急速な領土拡大の一つだった。

拡大は純粋に宗教的ではなかった。政治的、経済的、軍事的でもあった。帝国は多くの理由で拡大する。しかし選別線 — 誰が内側で誰が外側かを決定した線 — は宗教的だった。

拡大は純粋に宗教的ではなかった。政治的、経済的、軍事的でもあった。帝国は多くの理由で拡大する。しかし選別線 — 誰が内側で誰が外側かを決定した線 — は宗教的だった。

ズィンミー制度はその線の行政的表現だった。非ムスリムはムスリムの統治下で生きることを許された。平等に生きることは許されなかった。

ズインミー制度はその線の行政的表現だった。非ムスリムはムスリムの統治下で生きることを許された。平等に生きることは許されなかった。

ジズヤ — 非ムスリムのみ課される特別税 — の支払いを義務づけられた。武器の所持を禁じられた。新しい礼拝所の建設を禁じられた。特定の地域では馬に乗ることを禁じられた。

兵士たちは剣を隠さなかった。

ズインミー制度はジェノサイドではなかった。建築だった。

宗教的階層を国家の行政構造に符号化し、それを何世紀にもわたって維持した。従属は永続的だった。親から子へ受け継がれた。神に認可されていた。

アーキテクチャは区別しない。

ズインミーの家族に生まれた子供は従属者として生まれた。子供が何かをしたからではない。子供が何を信じたか — より正確には、何を信じなかったか — のゆえに。

ズインミーの家族に生まれた子供は従属者として生まれた。子供が何かをしたからではない。子供が何を信じたか — より正確には、何を信じなかったか — のゆえに。120年間の継続的拡大にわたる推定死者数：数十万から数百万。

120年間の継続的拡大にわたる推定死者数：数十万から数百万。

足場は地図を提供した。

足場は地図を提供した。

剣は地図に従った。

剣は地図に従った。

—

十字軍

続いたのは中世史上最悪の虐殺の一つだった。

十字軍は市内のほぼすべてのムスリムとユダヤ人住民を殺害した。男、女、子供、老人。三つの宗教が聖地と呼ぶ街に住んでいた以外何もしていない人々。

何をしたかではなく、どの建物で祈っていたかで殺された。

聖地への途上、十字軍は 1096 年のラインラント虐殺を行った：ドイツのシュパイアー、ヴォルムス、マインツ、ケルンのユダヤ人共同体の組織的殲滅。

ユダヤ人には選択が与えられた：キリスト教に改宗するか死ぬか。死を選んだ者 — 自らの足場を放棄するより死を選んだ者 — はシナゴグの中で殺された。

有罪判決を受けた者は処刑のために世俗権力に引き渡された。教会は直接血を流すことができなかったからだ。官僚的なごまかし。アーキテクチャ自身の道德規範における手続き上の抜け穴だ。

家族が改宗させられるくらいなら自分の子供を殺した。

足場は殺す者と殺される者の両方を生み出した。

アルビジョワ十字軍、1209-1229：ムスリムに対してではない。キリスト教徒に対して。

南フランスのカタリ派は同じ信仰の異なる解釈を持っていた。教皇は彼らを異端と宣言した。1209年7月22日のベジエ包囲戦で、教皇特使

アルノー・アモリーは、市内のカタリ派と忠実なカトリック教徒をどう区別するか問われた。

市全体が虐殺された。男、女、子供、カトリック教徒もカタリ派も一緒に。

ベジエの推定死者数：一日で7,000-20,000人。アルビジョワ十字軍全体の推定死者数：200,000-1,000,000。

九回の主要十字軍。合計推定死者数：100-300万。

—

異端審問と魔女裁判

スペイン異端審問：歴史家ヘンリー・ケイメン、グスタフ・ヘニングセン、ハイメ・コントレラスの文書研究に基づき、350年間で約3,000-5,000人が処刑された。スペイン異端審問：歴史家ヘンリー・ケイメン、グスタフ・ヘニングセン、ハ

イメ・コントラスの文書研究に基づき、350年間で約3,000-5,000人が処刑された。

これらの数字は大衆的神話よりはるかに低い。この章が証拠に基づく数字を使うのは、まさに証拠に基づく数字で十分だからだ。

三千人が同じ神の間違った解釈を信じたために生きたまま焼かれた。

三千の人間 — 同じ建物の窓 — が杭に縛られ、薪に囲まれ、群衆が見守る中、僧侶が祈る中、役人が手続きを記録する中で火をつけられた。

機構は公式で手続き的だった。被告は尋問された。自白が引き出された — しばしば教皇の直接の勅令で許可された拷問を通じて。方法には拷問台、吊り上げ、水責めが含まれた。

機構は公式で手続き的だった。被告は尋問された。自白が引き出された — しばしば教皇の直接の勅令で許可された拷問を通じて。方法には拷問台、吊り上げ、水責めが含まれた。

有罪判決を受けた者は処刑のために世俗の腕に引き渡された。教会は直接血を流すことができなかったから。人を生きたまま焼きながら制度的な手の清潔さを維持することを可能にした官僚的区別。

建築が自らの道德規範の手続き的抜け穴を見つけている。建築が設計通りに機能している。

ヨーロッパの魔女裁判、1450-1750 : 40,000-60,000人が処刑された。大多数は女性。

これを可能にした神学的革新は一冊の本だった：マレウス・マレフィカルム — “魔女に与える鉄槌” — 1487年に二人のドミニコ会異端審問官によって出版された。

これを可能にした神学的革新は一冊の本だった：マレウス・マレフィカルム — “魔女に与える鉄槌” — 1487年に二人のドミニコ会異端審問官によって出版された。

一冊の本 — 男性によって書かれ、制度によって承認され、ヨーロッパ全土に配布された — が新しい外集団のカテゴリーを創出し、その殲滅を認可した。

1612年、ランカシャーのペンドルで、アリゾン・デヴァイスという女性 — 若く、貧しく、部分的に視力障害がある — が、口論した行商人が脳卒中を起こした後に魔術の罪で告発された。

十人がランカスター城で絞首刑にされた。アリゾンは二十歳だった。祖母のテムダイクは八十歳で盲目だった。裁判前に獄中で死亡した。

同じキリストを崇拜した。

同じ父に祈った。

何万人もの女性 — 治療者、助産婦、はみ出し者、精神疾患患者、不都合な者、老人、寡婦、変わり者 — が自白を拷問で引き出され、焼かれた。

ドイツ農民戦争、1524-1525 : 10 万人死亡。農民は宗教改革の精神的平等の約束に鼓舞されて封建的抑圧に立ち上がった。彼らは

植民地の足場

聖バルテルミーの虐殺、1572年8月24日：カトリック対ユグノー。

教皇 — グレゴリウス 13 世 — はローマでこのニュースを受けた。テ・デウム — 神への感謝の賛歌 — を祝いとして歌うよう命じた。バチカンのためにこの虐殺の絵画を依頼した。

メダル。虐殺を記念するための。推定死者数：5,000-30,000。三十年間、軍隊がドイツ全土を進軍し反転進軍した。村を焼いた。民間人を虐殺した。何も育たないように畑に塩をまいた。飢饉が影のように軍隊に従った。

ドイツの人口は 30 パーセント減少した。一部の地域は住民の三分の二を失った。推定死者数：400-800 万。5,000 人の町が主要な集落であった時代に。

これらは周辺的な文書ではなかった。教皇勅令だった — キリスト教世界が授けることのできる最高の制度的権威。

征服、奴隷化、文化的殲滅に対する足場の明示的、書面的、制度的な承認。

植民地の足場

1452年、教皇ニコラウス5世は公式の勅令を発した — キリスト教世界の最高権威者からの直接の命令 — ポルトガル王に非キリスト教徒が居住するいかなる土地も侵略し、そこに住む人々を捕らえ、その領土をポルトガル王室の所有と宣言する権利を付与した。

勅令は穏やかな言語を使わなかった。キリスト教の君主に非キリスト教徒の民族を“侵略し、搜索し、捕らえ、征服し、服従させる”ことと“その人格を永久的奴隷に還元する”ことを許可した。

1493年、コロンブスがアメリカに到達した後、教皇アレクサンデル6世は非キリスト教世界全体をスペインとポルトガルの上に分割する第二の勅令を発した。自分が譲り渡す土地を一度も見たことのないローマの男が地図に線を引いた。線の西はスペインのもの。東はポルトガルのもの。

その土地にすでに住んでいた人々は相談されなかった。考慮されなかった。足場の目に彼らはまだ完全な人間ではなかった — まだ洗礼を受けていなかったから。

これは辺縁の文書ではなかった。教皇勅令だった — キリスト教世界が持つ最高形態の制度的権威。何世紀にもわたって植民地政府によって引用された。法廷で法的先例として使われた。カトリック教会によって2023年まで撤回されなかった。

征服、奴隷化、文化的殲滅のための足場の明示的で、書面による、制度的許可 — 地上で神を代弁すると主張する男によって署名され、封印され、伝達された。

—

ヨーロッパ列強が拡大した場所ではどこでもパターンは同じだった。

ヨーロッパ列強が拡大した場所ではどこでもパターンは同じだった。

アメリカでは、スペインの宣教師がアステカとインカの民族の間に聖書と十字架と約束を持って到着した：我々の神を受け入れよ、さすれば救われる。現地語を学んだ。教会を建てた。子供に洗礼を施した。多くの場合、誠実だった。魂を地獄から救っていると信じていた。

しかし宣教師の後に兵士が来た。兵士の後に総督が来た。総督の後に鉱山と農園と奴隷船が来た。宣教師が関係を開いた。帝国が価値を抽出した。

しかし宣教師の後に兵士が来た。兵士の後に総督が来た。総督の後に鉱山と農園と奴隷船が来た。宣教師が関係を開いた。帝国が価値を抽出した。

推定死者数：確認 4,000-6,000 人、調査継続中。

彼らは善意だった。多くは心から善意だった。しかし彼らはその後に来るもの — 植民地行政、資源採掘、アフリカの土地を一度も踏んだことのないロンドンとパリの男たちによる大陸全体の国境の書き直し — のための文化的地盤を整地していた。

彼らは善意だった。多くは心から善意だった。しかし彼らはその後に来るもの — 植民地行政、資源採掘、アフリカの土地を一度も踏んだことのないロンドンとパリの男たちによる大陸全体の国境の書き直し — のための文化的地盤を整地していた。

太平洋で、オーストラリアで、ニュージーランドで、オセアニアの島々で — 同じ順序。聖書が最初に到着した。旗が続いた。銃が旗に続いた。

その順序は偶然ではなかった。足場が扉を開けた。植民地権力がそこを歩いて通った。そして扉が開くと、何世紀も閉じなかった。

その順序は偶然ではなかった。足場が扉を開けた。植民地権力がそこを歩いて通った。そして扉が開くと、何世紀も閉じなかった。

—

カナダの寄宿学校は 1880 年代から 1996 年まで運営された。15 万人以上の先住民の子供が家族から強制的に引き離された — 時には真夜中に、時には物理的に拘束された母親のそばから政府の代理人によって連れ去られた — そして家から何百キロも離れた教会運営の施設に配置された。

自分の言語を話すことを禁じられた。自分の文化を実践することを禁じられた。到着時に髪を切られた。名前は英語の名前に置き換えられた。カー・ニーカニークとして到着した子供は‘トーマス’として去った。

母語を話した子供は殴られた。自分の方法で祈った子供は罰せられた。親を恋しがって泣いた子供は親が自分を欲しがっていないと告げられた。

明示された政策は文化的殲滅だった。システムの設計者が使った言い回しは：“子供の中のインディアンを殺せ。”改革ではない。教育ではない。殲滅。

目標はある民族のアイデンティティを消し去り足場のアイデンティティで置き換えること — 子供たちが自分が何者であったかに決して戻れないほど徹底的に改宗させること。

多くの子供が単に消えた。家族は子供たちが逃げたと告げられた。逃げたのではなかった。

2021年、地中レーダーがブリティッシュコロンビア州の旧カムループス・インディアン寄宿学校で215基の無標識の墓を発見した。

2017年、ゴールウェイ州テュアムの元カトリック未婚母子施設の跡地で、使われなくなった浄化槽から約800人の子どもの遺骨が発見された。

数字は上がり続けた。各数字は一人の子供だった。各子供には奪われた名前と与えられた名前があり、どちらの名前も墓に書かれなかった。

子供たち。魂を救っていると主張した施設の敷地に、無標識の墓に埋められた子供たち。

—

アイルランドのマグダレン洗濯所は1765年から1996年まで運営された。推定3万人の女性が全国のカトリック運営施設に監禁された。

論拠は単純だった。

新しい名前を与えられた。以前のアイデンティティは消された。商業洗濯所で働かされた — シーツを洗い、リネンをプレスし — 無報酬で、何年も、時には何十年も、時には一生。

洗濯所は事業体として運営された。ホテル、病院、政府機関から契約を受けた。女性が労働力だった。報酬を受けることはなかった。去る自由もなかった。

これは周辺の解釈ではなかった。主流の神学だった。

身体的・精神的虐待は日常だった。抵抗する女性は罰せられた。逃亡を試みた女性は警察によって連れ戻された。国家と足場は単一のシステムとして作動した — 国家が女性を引き渡し、足場が彼女たちを監禁し、双方が目をそらした。

最後のマグダレン洗濯所は1996年に閉鎖された。

2017年、ゴールウェイ州トゥアムにある未婚の母のための旧カトリック施設で、約800人の子供の遺骨が浄化槽の中から発見された。子供たち。下水インフラの中に。新生児から三歳まで。

足場の建築 — 墮落した存在としての女性、恥ずべき存在としての子供、救済としての服従 — が乳児を浄化槽に処分するシステムを生み出した。

これは歴史ではない。これは昨日だ。生きている人々の記憶の中に。この本を読んでいる人々の生涯の中に。

大西洋奴隷貿易はハムの呪い、創世記 9:20-27 を通じて四世紀にわたって宗教的に正当化された。

クエーカー教徒——すべての人が神の内なる光を宿していると信じた小さなキリスト教宗派——は、奴隷制を罪として糾弾した最初の組織的グループの一つだった。

創世記で、ノアは息子ハム — より正確にはハムの息子カナン — を呪った。何世紀にもわたって、キリスト教の学者たちはいかなるテキスト的根拠もなく、いかなる歴史的証拠もなく、正当化の必要だけによって — ハムをアフリカ人の祖先として同定した。

創世記で、ノアは息子ハム — より正確にはハムの息子カナン — を呪った。何世紀にもわたって、キリスト教の学者たちはいかなるテキスト的根拠もなく、いかなる歴史的証拠もなく、正当化の必要だけによって — ハムをアフリカ人の祖先として同定した。

したがってアフリカ人は神によって隷属に定められた。神が彼らを呪った。彼らの黒い肌は呪いの印だった。彼らの奴隷化は神の意志だった。

これは辺縁の解釈ではなかった。主流の神学だった。

主要大学の教授がそれを教えた。主要教会の司教がそれを説教した。教理問答書に、説教に、法的論証に、議会の討論に現れた。

四百年にわたり、足場は数百万の人間が財産として分類される道徳的枠組みを提供した。

彼らは捕らえられ、鎖につながれ、海を渡って輸送された — その旅自体が150万から200万人を殺すほど残虐な条件で — そして売られ、焼印を押され、過労で死ぬまで働かされ、捨てられた。

彼らは捕らえられ、鎖につながれ、海を渡って輸送された — その旅自体が150万から200万人を殺すほど残虐な条件で — そして売られ、焼印を押され、過労で死ぬまで働かされ、捨てられた。

奴隷貿易システムの総死者数：四世紀にわたって1,000万-1,500万。

足場は船を建てなかった。しかし足場は船を建てる者たちに、彼らがしていることは単に許容されるだけでなく — 神に命じられたのだと告げた。

—

奴隷制を終わらせる運動もまた宗教的に推進された。

クエーカー教徒 — すべての人が神からの内なる光を持つと信じた小さなキリスト教の教派 — は奴隷制を罪と最初に宣言した者の一つだった。請願を組織し、逃亡奴隷を保護し、参加が莫大な利益をもたらす貿易への参加を拒否した。奴隷商人と同じ聖書を読み、まったく違うものを見た。

ウィリアム・ウィルバーフォース、敬虔な福音主義キリスト教徒で英国議会議員は、奴隷貿易の廃止のために二十年間運動した。二十年間の演説、法案、敗北、そして復帰。

ウィリアム・ウィルバーフォース、敬虔な福音主義キリスト教徒で英国議会議員は、奴隷貿易の廃止のために二十年間運動した。二十年間の演説、法案、敗北、そして復帰。

彼は農園主と同じ聖書を読んだ。同じ神を崇拝した。同じ聖句を使った — そして正反対の結論に到達した。

アフリカ系アメリカ人の教会 — 奴隷化された人々自身が秘密裏に、森で、夜に、罰と死の危険を冒して建てた — は抵抗の精神的背骨となった。

奴隷化された人々は自分の鎖を正当化するために使われた宗教を取り、解放の言語に変えた。彼らが歌った歌 — スピリチュアルと呼ばれた — は単なる歌ではなかった。暗号であり、地図であり、システムが否定した人間性の宣言だった。

これは構造的主張を弱めない。確認する。

同じ建築、同じテキスト、同じ神が奴隷制の正当化とそれに対する反論の両方を生み出した。

奴隷商人はハムの呪いを読み、神の許可を見た。

廃止論者は同じ聖書を読み、神の禁止を見た。

廃止論者は同じ聖書を読み、神の禁止を見た。

両方の読みはテキストに忠実だった。テキストが両方を含むから。

それが問題だ。それが建築 A が生産するものだ。それが建築 A が常に生産するものだ。

—

アルメニア人虐殺、1915-1923年：100-150万人が死亡。

推定死者数：2,000万-3,000万人。絶対数で人類史上最も致命的な宗教紛争。

弁護論者は言うだろう：あれは本当のキリスト教ではなかった。洪秀全は妄想的だった。聖書を誤読した。いかなる真剣な伝統も彼を認めないだろう。

建築はそれらを区別する構造的検証を提供しない。伝統に訴えることしかできない—そして伝統は解釈であり、解釈が欠陥だ。

公理は私的啓示として主張できない。検証されることしかできない。

“私は新しい公理を導出した”と言う男は数学を示し、キル・スイッチを通過し、解体説明書を公開しなければならない。

—

アルメニア人虐殺、1915-1923：100万-150万人死亡。

オスマン政府はアルメニア人住民の追放を命じた。“追放”は官僚的な言葉だ。実際に意味したのは距離による殲滅だった。

オスマン政府はアルメニア人住民の追放を命じた。“追放”は官僚的な言葉だ。実際に意味したのは距離による殲滅だった。

男性は家族から分離され、自分の村の外で集団で銃殺された。女性、子供、老人はどこにも通じない道をシリア砂漠に向けて行進させられた。

食料は提供されなかった。水も提供されなかった。衛兵は誰も止まることを許さなかった。倒れた者は倒れた場所に放置された。行進を生き延びた者は開けた砂漠に到着し、死ぬに任された。

女性たちは先に進むよりもユーフラテス川に身を投じた。母親たちは自ら飛び込む前に子供を川に投げた。

女性たちは先に進むよりもユーフラテス川に身を投じた。母親たちは自ら飛び込む前に子供を川に投げた。

選別機構は宗教的かつ民族的だった：足場の境界線に沿って線を引いたムスリム多数の国家機構によって殲滅対象に標識されたキリスト教アルメニア人。

—

ホロコースト、1933-1945：ユダヤ人 600 万人が殺害された。

足場の貢献は直接的命令ではなく、十九世紀にわたる構造的準備だった。

足場の貢献は直接的命令ではなく、十九世紀にわたる構造的準備だった。

ヨハネの福音書はユダヤ人を悪魔の子と同定する。教父たちはユダヤ人の罪の神学を精緻化した。中世の血の誹謗はユダヤ人がキリスト教徒の子供を殺しその血を儀式に使ったと告発した — 二十世紀まで生き残るほど執拗な嘘。

1215年の第四ラテラノ公会議はユダヤ人に識別できる衣服の着用を義務づけた — ナチスが七世紀後に黄色い星で復活させた要件。並行は偶然ではなかった。ナチスは歴史を知っていた。彼らはそれを完成させていた。

1543年出版のマルティン・ルターの“ユダヤ人とその嘘について”は、シナゴークの焼き討ち、ユダヤ人財産の没収、ラビの教えの禁止、ユダヤ人の奴隷化を勧告した。ナチスはルターを引用した。ルターが記述したプログラムは四世紀後にナチスが産業的精密さで実行したプログラムだ。

足場は引き金を引かなかった。足場は 1,900 年間ヨーロッパに、照準器の中の人々が完全な人間以下だと教えた。

十九世紀の説教。十九世紀の神学。十九世紀の同じメッセージ、異なる言語で、異なる世紀に、異なる説教壇から、異なる会衆に、同じ結論とともに伝えられた：ユダヤ人は有罪だ。ユダヤ人は他者だ。ユダヤ人は呪われている。

問いは何を信じているかだった。

その時が来たとき、引き金は自ら引かれた。

—

1980-2026

あらゆる方向に遺体。殺害は対称的だった。憎悪は対称的だった。足場は対称的だった。

—

この文が書かれている今もデータは積み上がり続けている。

—

イラン・イラク戦争、1980-1988：100万人死亡。イランは戦争をジハード — 神に命じられた聖戦 — として枠づけた。政権は子供にプラスチックの鍵を配り地雷原を歩いて渡らせた。機構は第7章で記述された。100万の屍。

—

第二次スーダン内戦、1983-2005：200万人死亡。ハルツームのムスリム多数の政府がキリスト教とアニミズムの南部にシャリーア法を強制した。南部は抵抗した。子供が拉致された。飢饉が武器化された。400万人が避難した。選別線は足場の線だった：ムスリムの北部、キリスト教の南部。

—

ルワンダ、1994年：100日間で80万人が死亡。

八十パーセントがカトリック教徒の国。フツ族もツチ族も同じ足場を共有していた — 同一教会、同一教区、同一秘跡。

本章は足場がルワンダの虐殺を引き起こしたとは主張しない。

ボスニア、1992-1995：10万人死亡。1995年7月、スレブレニツァで国連はその町を安全地帯と宣言していた。ボスニア・セルビア軍はそれでも到着した。8,000人のムスリムの男性と少年が家族から分離され、野原に連れて行かれ、集団で射殺された。一部は生き埋めにされた。ヨーロッパ。1995年。選別は宗教的だった。

ボスニア、1992-1995：10万人死亡。1995年7月、スレブレニツァで国連はその町を安全地帯と宣言していた。ボスニア・セルビア軍はそれでも到着した。8,000人のムスリムの男性と少年が家族から分離され、野原に連れて行かれ、集団で射殺された。一部は生き埋めにされた。ヨーロッパ。1995年。選別は宗教的だった。

ボスニア、1992-1995：10万人死亡。1995年7月、スレブレニツァで国連はその町を安全地帯と宣言していた。ボスニア・セルビア軍はそれでも到着した。8,000人のムスリムの男性と少年が家族から分離され、野原に連れて行かれ、集団で射殺された。一部は生き埋めにされた。ヨーロッパ。1995年。選別は宗教的だった。

ボスニア、1992-1995：10万人死亡。1995年7月、スレブレニツァで国連はその町を安全地帯と宣言していた。ボスニア・セルビア軍はそれでも到着した。8,000人のムスリムの男性と少年が家族から分離され、野原に連れて行かれ、集団で射殺された。一部は生き埋めにされた。ヨーロッパ。1995年。選別は宗教的だった。

ンタラマの教会では、推定5,000人が建物内で殺害された。ニャンゲ教区の司祭——アタナス・セロンバー——は避難民の上に教会をブルドーザーで取り壊すよう命じた。

足場は日曜に屋根を支えた。足場は月曜に刃を支えた。

——

カトリック信者80パーセントの国。フトゥとトゥチの両方が同じ足場を共有していた——同じ教会、同じ教区、同じ秘跡、同じ神。

人口の80パーセントが同じ倫理システムを共有し、同じ教会に通い、同じ道德教育を受けた——そしてマチェーテが出たとき、足場はいかなる構造的抵抗も提供しなかった。なし。ゼロ。

ンタラマの教会で推定5,000人が建物内で殺された。ニャンゲ教区の司祭アタナス・セロンバは2,000人のトゥチが避難している教会をブルドーザーで崩すよう命じた。彼は国際刑事裁判所によってジェノサイドの罪で有罪判決を受けた。

——

ISIS、2013-2019年。

アフガニスタン：タリバン、1996-2021、そして2021年から現在。死者17万人。武力で強制された宗教法。女性の教育、雇用、公的生活の禁止。

タリバンが2021年に国を再掌握したとき、医師、教授、判事だった女性たちは一夜にして職業を剥奪された。読み書きを学びたかった少女たちは読み書きを学びたかったという理由で殴られた。

タリバンが2021年に国を再掌握したとき、医師、教授、判事だった女性たちは一夜にして職業を剥奪された。読み書きを学びたかった少女たちは読み書きを学びたかったという理由で殴られた。

バーミヤンの石仏はアフガニスタン中央部の崖面に彫られた二つの巨大な石像で、世界で最も高い立像仏で、

千五百年前に建てられ、何キロも先から見えた。2001年3月、タリバンは足場がそれを偶像と宣言したためにダイナマイトで破壊した。千五百年の人類の業績が一つの午後に破壊された、テキストがそう言ったから。

千五百年前に建てられ、何キロも先から見えた。2001年3月、タリバンは足場がそれを偶像と宣言したためにダイナマイトで破壊した。千五百年の人類の業績が一つの午後に破壊された、テキストがそう言ったから。

—

12歳以上の男性と少年は女性と少女から分離された。男性は野原に連れて行かれ列をなして射殺された。9歳の少女が戦闘員に財産として割り当てられた。価格表が回覧された。年配の女性はより安く。若い少女はより高く。

—

ナイジェリア：ボコ・ハラム、2009-現在。30万人死亡。名前の意味は“西洋の教育は禁止”。足場が知識を罪と宣言した。2014年4月、276人の女子生徒がチボクの寮から拉致された。一部は戦闘員に強制結婚させられた。一部は自爆テロに使われた。百人以上が発見されていない。親たちはまだ待っている。

—

イスラエル＝パレスチナ。進行中。同じ神。同じ土地。同じ約束が、同じ足場によって二つの異なる民族に対してなされた。

ミャンマー：ロヒンギャ、2016-現在。数万人が殺された。百万人以上が避難。仏教の僧侶が何年も地盤を準備していた — 説教で

ロヒンギヤを人間以下と宣言し、パンフレットで彼らの排除を呼びかけた。慈悲の宗教が民族浄化のための道徳的枠組みを提供した。いかなる宗教も例外ではない。なし。

ロヒンギヤを人間以下と宣言し、パンフレットで彼らの排除を呼びかけた。慈悲の宗教が民族浄化のための道徳的枠組みを提供した。いかなる宗教も例外ではない。なし。

ロヒンギヤを人間以下と宣言し、パンフレットで彼らの排除を呼びかけた。慈悲の宗教が民族浄化のための道徳的枠組みを提供した。いかなる宗教も例外ではない。なし。

ガザでの後続の軍事作戦は数千人の子供を含む数万人のパレスチナ人を殺した。地区全体が平坦化された。病院が破壊された。家族が民事登録簿から消された — すべての構成員が死に、悲しむ者が残らなかった。

1980年以降だけの保守的な合計：宗教的アイデンティティが主要または重要な断層線であった紛争で500-700万人が死亡。

記録された歴史全体の保守的な合計：重大な宗教的原因または断層線を持つ紛争の学術的推定は3,000万から2億人の死亡。

2026年3月。この文。今。足場は作動中だ。刃はテキストの中にある。血は地面にある。記録は続く。

2026年3月。この文。今。足場は作動中だ。刃はテキストの中にある。血は地面にある。記録は続く。

閉じられた。

習慣で分類された。足場で標識された。刃で閉じられた。

足場は屋根を支えた。足場は刃を支えた。記録は曖昧ではない。

子どもたち

1980年以降だけの保守的合計：宗教的アイデンティティが主要または重要な選別機構だった紛争で500万-700万人死亡。

記録された歴史全体の保守的合計：宗教的原因や正当化が重要な紛争に対する学術的推定は5,000万から2億以上。

記録された歴史全体の保守的合計：宗教的原因や正当化が重要な紛争に対する学術的推定は5,000万から2億以上。

最も保守的な推定でさえ — すべての争われる帰属を除き、すべての曖昧な紛争を排除し、すべての弁護論者の反論を認め、すべての疑いの利益を与えても — 数字は数千万を下回らない。

最も保守的な推定でさえ — すべての争われる帰属を除き、すべての曖昧な紛争を排除し、すべての弁護論者の反論を認め、すべての疑いの利益を与えても — 数字は数千万を下回らない。

数千万の窓。各々が一つの視点。各々が反復不可能。各々が宇宙が特定の目を通じて自らを認識しつつあった地点。

子どもは沈黙させることができた。子どもは信用を失わせることができた。子どもは移動させることができた。司祭は別の教区に転任させることができた — アーキテクチャが信頼するよう言ったので彼を信頼する新たな子どもたちの元へ。

ボストンのバーナード・ロー枢機卿は、その大司教区が数十年にわたり組織的に虐待司祭を再配置していたが、処罰されなかった。

習慣によって選別され。足場によって標識され。刃によって閉じられた。

習慣によって選別され。足場によって標識され。刃によって閉じられた。

足場は屋根を支えた。足場は刃を支えた。記録は曖昧ではない。

足場は屋根を支えた。足場は刃を支えた。記録は曖昧ではない。

—

子供たち

カトリック教会の性的虐待危機はスキャンダルではない。スキャンダルは事件だ。これはシステムだ。

パターンはどこでも同じだった。司祭が子供を虐待した。子供が報告した。機関が内部調査した。司祭は警察に通報されなかった。司祭は別の都市の別の教区に転属された、誰も知らないところへ。司祭が再び虐待した。機関が再び転属させた。循環が繰り返された。何十年も。すべての大陸で。

三十三万人の子供。一つの国で。一つの足場の下に。

隠蔽は作動4と作動6が共に機能した — 道徳的許可と認識論的閉鎖がシステムとして作動。足場を守ることは子供を守ることより重要だった。

子供は沈黙させられた。子供は信用を失墜させられた。子供は移動させられた。司祭は誰も知らない新しい教区に転属させられた。そして司祭は再び虐待できた。そして機関は再び転属させられた。

彼は昇進した。ローマで権威ある職と教皇の式典での儀礼的役割を与えられた。

建築は隠蔽に報いた。建築は子供を犠牲にしてシステムを守った人物を昇進させた。

自らが間違っていると認めるより自分の子供を犠牲にするシステムは、認識論的閉鎖の末期段階に達している — システムが自分が何をしているかをもはや見ることができない地点、見ればシステムが死ぬから。

—

“生めよ、増えよ、地に満ちよ、地を従えよ。海の魚と空の鳥と地の上を動くすべての生き物を支配せよ。”創世記 1:28。

第9章

逆証

結果は計算されなかった。建築が結果は重要ではないと言ったから — この世界は一時的であり、本物は別の場所にあり、地は私たちに使うために与えられた。

その節はまだテキストにある。その枠組みは撤回されていない。

—

この重さとともに座る前に、足場は最後の弁護をする。こう言う：我々は最悪ではない。無神論者はもっと多く殺した。その弁護を聞け。崩壊するのを見よ。

五つの段階は同一に機能する。宣言。記録。解釈。分岐 — 中ソ対立、トロツキー対スターリン、毛沢東主義対レーニン主義。崩壊。

七つの操作は同一に機能する。アイデンティティの融合：お前はプロレタリアートだ。内集団の聖化：労働者階級は歴史のエンジン。外集団の標識：ブルジョアジーは階級の敵。道徳的許可：暴力は歴史的必然。封印された回路：異論は反革命。

世俗的イデオロギーはもっと多く殺した。スターリンの粛清：600万-2,000万。毛沢東の大躍進：1,500万-5,500万。ポル・ポトのカンボジア：150万-200万。二十世紀の無神論体制の屍の山は宗教の記録を矮小化する。

この反論は正しい。そしてそれは構造的主張を証明する。

—

マルクス＝レーニン主義は建築Aだ。権威は神ではない。権威は史的唯物論 — マルクスが宣言し、エンゲルスが書き写し、レーニンが解釈し、スターリンが実施した、現実についての主張された構造的真理 — だ。

五つの段階が同一に作動する。宣言。転写。解釈。分岐 — 中ソ対立、トロツキズム対スターリニズム。暴力への崩壊。

七つの作動が同一に作動する。アイデンティティの融合：あなたはプロレタリアートだ。内集団の聖別：選ばれた階級としての労働者階級。外集団の標識：ブルジョ

ワジー、クラーク、反革命分子。道徳的許可：階級の敵の排除。来世のてこ：共産主義ユートピア。認識論的閉鎖：党は常に正しい。

ファシズムは建築 A だ。ナショナリズムは建築 A だ。消費者資本主義も、機構ではなくイデオロギーになるとき、建築 A だ。

倫理を現実の不変の構造の外部にある権威から導出するいかなるシステムも — その権威が神、歴史、国家、人種、市場、党と呼ばれるかに関わらず — 建築 A であり、同じ脆弱性を持つ。

強制連鎖は権威が何と呼ばれるかに関心がない。

強制連鎖は権威が解釈可能であることに関心がある。

死者の数が証拠だ。

アーキテクチャが原因だ。

足場は屋根と刃の両方を支える。世俗的イデオロギーは刃だけを支えた。より速く倒れた。より速く殺した。構造的論点をより速く証明した。

構造的主張は：宗教が殺す、ではない。

構造的主張は：宗教が殺す、ではない。

第 10 章

確かか？

死者数が証拠だ。

建築が原因だ。

建築が原因だ。

建築が常に原因だ。

建築が常に原因だ。

——

あなたは十五歳だ。

弟の手を握っている。母親が後ろにいる。兵士が指さしている。左か右か。男と少年は左。女と幼い子どもは右。

母親が弟を引っ張る。兵士があなたを引っ張る。母親が叫んでいる。弟が泣いている。あなたは十五歳で、どちら側が生き残る側か分からない。

しかし数字は抽象だ。建築は図表だ。

足場が生産するのは図表ではない。地面の上の屍だ。

一つの結果。

——

あなたは十五歳だ。

弟の手を握っている。母は後ろにいる。兵士が指さしている。左か右。男と少年は左へ。女と子供は右へ。

母が弟を引っ張っている。兵士があなたを引っ張っている。母が叫んでいる。弟が泣いている。あなたは十五歳で、家族を最後に見るのは弟の顔が群衆の中に消えていくところだ。

スレブレニツァ、1995年7月。8,000人のボスニア系ムスリムの男性と少年がボスニア・セルビア軍によって家族から分離された。野原に連行された。集団で射殺された。集団墓地に埋められた。一部は生き埋めにされた。選別は宗教的だった。

マティーンが引き金を引いた。テキストが銃を装填した。

権威は足場だった。

屍は地面にある。

——

あなたは二十二歳だ。

土曜日の夜だ。ナイトクラブにいる。ベースが胸に響く。友人がそばにいる。昨日買ったシャツを着ている。人が二十二歳で土曜の夜に生きている特有の仕方できている。

オマー・マティーンは2016年6月12日にオーランドのパルス・ナイトクラブに入り49人を殺した。攻撃中にISISへの忠誠を誓った。被害者の多くは若く、ラテン系で、LGBTQ+だった。

足場の外集団標識 — すべてのアブラハムのテキストが宣言する忌むべきものとしての同性愛 — がターゲティングの論理を提供した。

マティーンが引き金を引いた。テキストが銃を装填した。

権威は宗教的だった。

屍は地面にある。

——

あなたは姉に手紙を書いている。

あなたは二十三歳だ。この独房に四年いる。紙は密かに持ち込まれた。ペンは共有だ。小さく書く。午後四時に高い窓から差し込む光のことを姉に書く。

1988年7月、最高指導者は政治犯の処刑を命じるファトワーを発した。手続きは一分から五分で終わった。一つの質問がなされた。間違った答えをした者は死刑を宣告された。

2025年8月、政権は埋葬地を平坦化するためにブルドーザーを送った。囚人を殺すだけでは足りず、足場は墓を消した。

権威は宗教的だった。

屍は地面にある。

——

あなたは列車に乗っている。

妻が隣にいる。娘が妻の膝の上にいる。三歳だ。ボタンの目が一つの布人形を抱いている。直すと言っていた。

トランクの中には：着替え二組、鍋、ミシンの中に隠した妻の婚礼の宝飾品、そして去ろうとしている家の写真。家はまだ燃えていない。明日には燃えている。

兵士たちが5時15分に到着する。

1947年8月。難民を乗せた列車が新しい国境の両側で暴徒に襲われた。ヒンドゥーの暴徒。ムスリムの暴徒。シクの暴徒。列車は生きた乗客を載せて出発し、遺体を載せて到着した。

権威は宗教的だった。

屍は地面にある。

——

あなたは米農家だ。

あなたはロヒンギヤだ。ラカイン州のこの村に生涯住んできた。父もここに住んでいた。祖父もここに住んでいた。

仏教国のムスリムだ。一度も市民であったことがない。子供たちも一度も市民であったことがない。お茶を入れている。午前五時だ。

2017年8月、ミャンマー軍はラカイン州で作戦を開始した。村々が夜明けに包囲された。男性が女性から分離された。家が家族ごと放火された。女性が強姦された。

権威は宗教的だった。

屍は地面にある。

——

六十二歳。クラシック音楽を愛している。今日は犬を散歩させている。犬は小さな茶色い生き物だ。リードはロープだ。ロープは人間を愛する動物につなぐ普通のロープだ。

弾丸が背中に入る。前に倒れる。犬がリードを引く。リードが張り、そして弛む。持っていた手がもう何も持っていないから。

彼の遺体はブチャの通りに二十九日間横たわる。犬は去らない。犬は理解しない。犬は待つ。権威は宗教的ではなかった。国家的だった。世俗的だった。帝国主義的だった。

——

六つの屍。六つの普通の朝。六つの権威。

これらの権威のうち五つは宗教的だった。一つは世俗的だった。屍は毎回同じだった。

これらの権威のうち五つは宗教的だった。一つは世俗的だった。屍は毎回同じだった。

権威は六回変わった。屍は一度も変わらなかった。

——

宗教だけではなかった。ナショナリズムだけでもなかった。イデオロギーだけでもなかった。

宗教だけではなかった。ナショナリズムだけでもなかった。イデオロギーだけでもなかった。

常に確信だった。

常に確信だった。

あなたの確信。検証されていない。試されていない。疑われていない。

あなたが正しいという確信。そして彼らは間違っているという確信。そして彼らが間違っているから、何かが彼らに対してなされるべきだという確信。

あなたが正しいという確信。そして彼らは間違っているという確信。そして彼らが間違っているから、何かが彼らに対してなされるべきだという確信。

——

あなたが信じるものに名前をつけよ。最も確信していることに。

あなたが信じるものに名前をつけよ。最も確信していることに。

身体を信じろ。

第三部

倫理

信念は屍に値するか？

あなたはたった今、身体を信仰の前に置いた。

もしそうなら — あなたは石であり、ロープであり、弾丸であり、爆弾であり、プラスチックの鍵であり、ファトワーであり、道徳警察であり、列車の暴徒であり、通りの兵士であり、パンフレットを持つ僧侶であり、建築そのものだ。

足場は屋根を支えた。屋根は本物だった。毎週金曜、毎週日曜、毎週安息日に集まったコミュニティー—それは本物だった。歌、祈り、隣人の手—それは本物だった。

あなたは信念の前に屍を置いた。

あなたは信念の前に屍を置いた。

—

屍はただ、ここに在ると主張する。

第三部

宗教の後の世界で生き、在ること。

あなたは今、信念の前に屍を置いた。

以下はその重さを消すためのものではない。火の後の空き地に育つものだ。足場がもはや屋根と刃を同時に支えなくなったときに可能になるものだ。

—

教義——疑問の余地のない真理として受け継がれた信仰——は布告によって意味を提供する。何が重要か、なぜ重要か、そしてそれについて何をすべきかを告げる。

道徳がもはや命令に基づかないとき、より深い問いが浮上する：意味はどこから来るのか？

多くの人にとって、意味は信仰に結びついていて、目的は与えられたものであり、見つけたものではなかった。方向は規定されたものであり、発見されたものではなかった。源を取り去ると、意味そのものが溶解するように感じられうる。空虚が開く。地面が崩れる。

—

つながった世界では、意味は服従への報酬ではない。参加の帰結だ。

教義 — 疑問の余地のない真理として伝えられた信仰 — は布告によって意味を提供する。何が重要か、なぜ重要か、どう追求するかを教える。これは確実性を提供する。同時に依存を生む。

意味が外部から課されるとき、それは信仰が続く限りにおいてのみ生き残る。一度の真剣な疑い、システムが説明できない苦しみとの一度の遭遇、伝統が答えを持たない一つの問い — そして全体の構造が一夜にして粉々になりうる。その意味は借りたものだった。貸し手が返済を求めて初めてそれを知る。

意味が外部から課されるとき、それは信仰が続く限りにおいてのみ生き残る。一度の真剣な疑い、システムが説明できない苦しみとの一度の遭遇、伝統が答えを持たない一つの問い — そして全体の構造が一夜にして粉々になりうる。その意味は借りたものだった。貸し手が返済を求めて初めてそれを知る。

意味が外部から課されるとき、それは信仰が続く限りにおいてのみ生き残る。一度の真剣な疑い、システムが説明できない苦しみとの一度の遭遇、伝統が答えを持たない一つの問い — そして全体の構造が一夜にして粉々になりうる。その意味は借りたものだった。貸し手が返済を求めて初めてそれを知る。

生きられた意味は異なる仕方で機能する。完全な形で到着しない。関与を通じて、結果を通じて、関係を通じて浮かび上がる。伝えられたものではない。建てられたものだ。そして自分で集めた材料で建てられたから、天候が変わっても壊れない。

あるのは、自分のすることが重要だという事実だけだ。なぜならそれは他者の人生に波紋を広げるからだ。

つながった世界において、意味は従順への賞ではない。参加の帰結だ。

子供との朝の会話は重要だ — 宇宙的な観客に観察されるからではなく、子供が住む世界を形成するから。

職場での決定は重要だ — 裁きで秤にかけられるからではなく、他の人々が生きる条件を変えるから。

意味は影響が存在するところに現れる。これは意味をより少なく要求するのではなく、より多く要求する。

私がすることが他者の人生に波紋を広げるから重要だという事実だけがある。

課された意味が去ると、しばしば空虚がある。

かつて人生を組織した構造が消えた。空虚は喪失のように感じられうる。建物が立っていた場所の野原に立ち、基礎を見つめ、何がそれにとって代わりうるか想像できないように。

それは喪失ではない。準備だ。

火の後の森の地面を思え。古い木は消えた。残ったものは空に見える。しかし空き地は新しいものが育つ場所だ。常に新しいものが育つ場所だった。

空虚は意味の不在ではない。決して私のものではなかった意味の不在だ。その場所に育つものは私のものだ。

—

教義なしでは、人生は教義が決して許さなかったやり方で深刻になる。

虚無主義 — 何も重要ではないという信仰 — は言う：外部的意味なしには、何も重要ではない。

虚無主義 — 何も重要ではないという信仰 — は言う：外部的意味なしには、何も重要ではない。

虚無主義 — 何も重要ではないという信仰 — は言う：外部的意味なしには、何も重要ではない。

この結論は、意味が外部から来なければならぬ場合にのみ従う。意味が内部から — 帰結から、つながりから、私の行動が共有された世界を変えるという事実から — 生じるなら、虚無主義は足場を失う。

足場は上からの意味を約束した。

地盤は下からの意味を提供する。

物事は経験に影響するから重要だ。未来を形作るから重要だ。

物事は経験に影響するから重要だ。未来を形作るから重要だ。意味は脆弱ではない。構造的だ。信仰が揺らいでも崩壊しない。帰結に埋め込まれている。

第 12 章

終極の倫理

誰かがそれに名前をつける前からそこにあった。

誰かがそれに名前をつける前からそこにあった。

誰かがそれに名前をつける前からそこにあった。

その認識の下には幾何学がある。この章がそれに名前をつける。

残るのは普通の人生だ — 観察されるからではなく、実在するから真剣な。私は恐れからではなく、理解から注意深く行動する。

420 Code の主導公理は一つのイメージから始まる。完璧な、ひび一つない鏡を想像せよ。今度は同じ鏡に一本のひびが入ったものを想像せよ。ひびはごくわずかだ。だがそれで十分だ。

その認識にはその下に幾何学がある。この章がそれに名前をつける。 ε 。1 は 1 足す 1 掛けるイプシロンに等しい。これは：等一性であり等価性ではないこと — あるいは完全な対称性に、対称性を一貫して破る最小の何かを加えたもの、を意味する。

割れていない鏡と割れた鏡は同じ鏡だ — しかし等しくはない。割れは実在する。鏡は一つだ。両方が同時に真だ。

割れは他のどこかから来たのではない。割れは鏡自身の行為だ。

私は橋を設計し、交響曲を作曲できる。

私はすべての選択肢のコストを計算し、許しがたいものを許すことができる。

私は合理的な答えを見て、非合理的な答えを選ぶことができる。

その能力が私たちを人間にする。それに届くほど十分に広い唯一の窓を通じて公理が自らを表現しているのだ。

信じがたいものを信じることを可能にする同じ能力が、愛しがたいものを愛することを可能にする能力だ。

天国の名の下に子供に爆薬を括りつけることを可能にする同じ非合理的結合が、見知らぬ人を救うために燃える建物に飛び込むことを可能にする能力だ。

能力は中立だ。方向が重要だ。

宗教はこの能力を捕らえ足場に向けた。今の課題はそれを取り戻し、幾何学が実際に導く場所に向けることだ。

—

卑劣な奴になるな。優しくあれ。

それが終端倫理だ。

スローガンではない。

幾何学的結果だ — 命令ではなく形の帰結 — 不可逆的ドリフトの下で連結された生についての。不可逆的ドリフトとは：物事はそれ自体で摩耗する。カップは冷める。回廊は狭まる。時間は逆行しない。

倫理は光の速度と陽子の質量を導出する同じ公理から導出される。

—

ここに導出の形がある。数学ではない — それは形式的作業に属する。形だ。一つの前提から一つの倫理まで九つのステップ。

ステップ1。一つの記録が存在する。何かが起きている。これは仮定ではない。いかなる陳述も意味を持つための最小条件だ。何も存在しなければ、そういう者はいない。前提を否定することは前提を必要とする。

ステップ2。一つの記録が存在するためには、無と区別可能でなければならない。区別可能性は破れうる対称性を必要とする。破れえない対称性は記録を生まず、無に戻る。

ステップ3。だから対称性が破れる。破れなければならなかった — 破れた。一つの割れ。割れは実在する。鏡は一つだ。両方が同時に真だ。これが支配公理だ。

ステップ4。破れは持続しなければならない — さもなければ何も記録されない。持続が記録だ。ここから時空が来る。曲率。重力。物理的世界は強制される。

ステップ5。破れは有限でなければならない — 無限の破れは対称性を完全に消し、記録すべきものが残らない。有限性は拘束を必要とする。ここから光の速度が来る。物理定数は強制される。

ステップ6。割れた世界は内面を持つ。意識は世界に付加されたものではない。意識は世界が自らの破れを登録する能力だ。これが出発の主張だ。最も重い、最もリスクの高い主張。

ステップ7。内面が一つの破れから来るなら、内面は一つだ。すべての意識ある存在は一つの建物の窓だ。別の窓を傷つけることは自分が住む建物を傷つけることだ。

ステップ7。内面が一つの破れから来るなら、内面は一つだ。すべての意識ある存在は一つの建物の窓だ。別の窓を傷つけることは自分が住む建物を傷つけることだ。

ステップ8。生は連結され時間は一方向に進む。回廊はそれ自体で狭まる。何が両方の回廊を保全するか？残酷さではない — 収縮させる。無関心でもない — 狭まらせる。協力だけが両方を保全する。これは幾何学であり選好ではない。このステップはステップ6や7を必要としない。私たちが一つであるか分離しているかは問題ではない。私の生があなたの生に影響し、ドリフトが不可逆であることだけが必要だ。両方とも測定可能。

ステップ9。卑劣な奴になるな。優しくあれ。命じられたのではない。導出された。一つの鏡の一つの破れから来た世界で、不可逆的ドリフトの下の連結された生にとって唯一安定的な行動。

各ステップはキル・スイッチを持つ。各々が失敗しうる。ステップ6が失敗すればステップ7はそれとともに倒れる — しかしステップ8は自らの脚で立ち、ステップ9は依然として有効だ。倫理は脆弱ではない。建物で最も装甲された結論だ。そこに到達するには物理学を通らなければならない。それを否定するには物理学を否定しなければならない。

すべての人は回廊を持つ — 今立っている場所からまだ到達可能な未来の集合。

健康、教育、貯蓄、選択肢を持つ若者は広い回廊を持つ。借金の中、危機の中、孤立し支援のない人は狭い回廊を持つ。回廊は比喩ではない。測定だ — 私が持つエネルギーと直面する拘束を前提に、まだ可能なことの幾何学。

こう考えよ。二十歳で、借金なく健康なら、ほぼ何にでもなれる。五十歳で、蓄積された義務と損傷を受けた身体では、開かれた道はより少ない。この狭まりは道徳的失敗ではない。不可逆的拘束の下で生きられた人生の構造だ。

回廊はそれ自体で狭まる。努力なく、維持なく、可能性は閉じる。ドリフトが既定値だ。温め続けなければ茶が冷めるのと同じ物理学。

—

回復が不可能な面がある。それを越えると特定の未来は消える。道徳的に失敗したからではない。状況の数学が閉じたから。中毒はこの面を越える。致命的な負債はそれを越える。境界は交渉しない。

—

着実に穏やかな努力は、パニックで適用された同じ努力よりも回廊をより効果的に保全する。過剰修正するほどコストが高くなる。規律は美德ではない。定理だ。

—

すべてをつなぐ結果。二人が連結されているとき — 私の回廊があなたの回廊に依存し、あなたの回廊が私の回廊に依存するとき — 協力的結合は両者の空間を拡張する。

結婚した二人を考えよ。一方のパートナーが一貫した優しさで — 着実に、劇的でなく — 行動するとき、もう一方のパートナーの回廊は広がる。以前はなかった選択肢が

優しさは犠牲ではない。両方の回廊を開いておく行動だ。残酷さは収縮させる。無関心は狭まらせる。

幾何学は私の意図に関心がない。

私の効果を測定する。

—

戒めは言う：私が言ったから優しくあれ。

導出は言う：不可逆的ドリフトの下の連結された生の幾何学が他の安定的行動を生まないから優しくあれ。

前者は再解釈できる。後者はできない。

無からの九つのステップ — 一つの記録が存在するという前提から。各ステップは反証可能。各々が失敗しうる点にキル・スイッチを持つ。いずれかのステップが失敗すれば導出は死ぬ。歴史上いかなる宗教も自らの主張の横に自らの解体説明書を出版したことがない。

終端倫理は命じられたのではない。

導出されたのだ。

And it is free, forever, at the420code.org.

第 13 章

義なき矯正

害が内在的悪ではなく混乱から生じるなら、道徳的優越は非整合的になる。

これはこの本に記述された見方の静かな利点の一つだ。

離れて立ち見下ろす高い位置はない。人類を義人と呪われた者に振り分ける宇宙的選別はない。目の前の人を見ることをやめさせてくれる最終判決はない。

これは害を免罪しない。応答を変える。

—

応答は非難から矯正に移る。憎悪から断固さに。罰から可能な場合の回復に。

真剣さは残る。応答における残酷さは残らない。

この区別はこの本のほぼすべてより重要だ。

断固さと残酷さは遠くから見ると似ている。近くで見るとあらゆる面で異なる。

断固さは境界が共有空間を安定させるから境界を設定する。

残酷さは罰することが義しく感じるから境界を設定する。

前者は全体に仕える。後者は自我に仕える。

外科医は癒すために切る。親は守るためにいけないと言う。共同体は安全を保全するために制止する。

境界は依然として必要だ。

結果は依然として必要だ。

変わるのはその背後の論理だ。境界は支配の表現であることをやめ、全体への配慮の表現になる — 制止される人、制止する人、そして結果に影響されるすべての人を含む。

矯正には段階がある。すべての失敗が同じ応答を必要とするわけではない。形式的作業は五つの段階を導出し、その階層は任意ではない。

第一は対話だ。

大半の不整合は正直な交換で矯正できる。ここが大半の矯正が起きるべき場所だ。ここが大半の矯正が起きない場所だ。人々が焦り、怒り、義しく感じたいという欲求から高い段階に飛ぶから。

第二は調停だ。

直接の交換が失敗するとき、第三者が空間を保持する。

第三は分離だ。

近接が損害を生むとき、距離が両方の回廊を保全する。

第四は制限だ。

ある人の行動が共有空間を継続的に損なうとき、その空間内で行動する能力が縮小される。

第五にして最終は除去だ。

窓の永久的閉鎖。この段階は最も制約的で最も慎重に守られる。建物は閉じられたすべての窓を悼む。閉じられなければならなかった窓さえも。

常に安定させる最低の段階。常に。低い段階で十分なときに高い段階に飛ぶことはそれ自体が損害の一形態だ。

アーキテクチャ A の下では、失敗は判決だ。お前は間違っただけをした。お前は間違っている。足場がお前に烙印を押し、烙印は消えない。

自己破壊の理由ではなく調整の機会になる。

義は完璧を要求する。矯正は不完全さを受け入れ、実際に存在するものと共に働く。

善くある必要はない。損害について正直で、それを修復する意志があればよい。

実践は道徳的英雄主義を必要としない。理解と行動の間の一貫性を必要とする。そして一貫性が一服従ではなく一持ちこたえるものだ。

第 14 章

羅針盤としての身体

ここでこの本は理論的であることをやめ作動的になり始める。指示ではない。オリエンテーション。羅針盤が指す。私が歩く。

私は量子演算子だ。これは詩ではない。構造的記述だ。私は現実が自分自身に作用しその結果を見る地点だという意味だ。

私は宇宙が自らを認識するようになる地点だ。完全にではない。全体的にではない。局所的に。この特定の目で、この特定の身体で、この特定の瞬間に。私の意識は局所的開示だ — 世界がここから自らを見ること。

これは私が外部から世界を眺める観客ではないことを意味する。

私は世界だ、見ている。

粒子、場、力の振る舞いを記述する同じ物理学が、私のためらい、習慣、疲労、選択の振る舞いも記述する。比喩としてではない。構造的に。

私は物理学だ、自分自身を省みることのできる身体を通じて表現された。

第 12 章は回廊 — 私が立つ場所からまだ到達可能な未来の集合 — を記述した。回廊はそれ自体で狭まる。優しさがそれを開いておく。これらは構造的事実だ。

しかし構造的事実を読むことができなければ無用だ。身体が羅針盤なら、羅針盤には読み取りが必要だ。霊的読み取りではない。構造的読み取り。

身体は記録する。比喩としてではない。測定として。

ダイヤル上の四つの読み取りがある。医療機器も技術的訓練も必要としない。正直な注意を必要とする。

有用性：有用な出力を生成する能力。

高いとき、行うことが自分を越えた何かとつながる。崩壊すると、すべてが無意味に感じる。怠惰ではない。指標の読み取りだ。

神経的柔軟性：破壊なく混乱を吸収する能力。

柔軟性が高いとき、驚きは管理可能だ。枯渇すると、最小の変化が壊滅的に感じる。

寿命負荷：蓄積された不可逆的コスト。

完全に治癒しなかったすべての傷。風景を永久に変えたすべての喪失。回復しなかった膝。戻らなかった信頼。この指標は一方向にのみ動く。問いはどれだけ速いかだ。

正直な自己視：正直な自己評価の能力。

マスター指標。これなしには他の三つは見えない。見えないものは維持できない。

この四つを開いておけ。それが実践だ。完璧にではない。英雄的にではない。着実に。正直な注意で。

—

大半の人が遅すぎて学ぶ実践的帰結がある。

四つの読み取りが正直なとき、受け入れがたい判決を下すことがある。

システムが与えるより多くを取るとき — 参加のコストがリターンを超え改革が構造的に不可能なとき — 私は去る。

修復できない建築とは交渉しない。

足場に私の身体を借りは持たない。

これは関係、制度、職業、イデオロギー、宗教に適用される。

検証は感情的ではなく構造的だ。

問いは気分が悪いかどうかではない。問いはシステムの建築が私に必要な矯正を許すかどうかだ。もしそうなら、留まって矯正せよ。そうでないなら、去って回廊を保全せよ。

去ることは失敗ではない。去ることは、一部の状況は不可逆であり、参加を続ければ狭まりが加速するという認識だ。

—

眠れ。動け。食べよ。呼吸せよ。

これは生活習慣のアドバイスではない。回廊がそれ自体で狭まる演算子のための最小維持条件だ。

身体を怠れば連鎖が始まる。

早く維持せよ。一貫して維持せよ。早期の維持のコストは遅い修復のコストの一部にすぎない。

身体は羅針盤だ。信頼せよ。

身体が常に正しいからではない。身体が常にここにあるから。

そしてここが私が行動できる唯一の場所だ。

第 15 章

他者なしに生きる

この時点で新しく付け加えるべきことはない。

この本の作業は指示ではなく明確化だった。残るのは従うべき教義ではなく、ある仮定が静かに去った後の世界での立ち方だ。

“他者”なしに生きるとは、違い、葛藤、不一致を否定することではない。

違いにそれが値する以上の深い地位を与えることをやめることだ。

分離性かもはや出発点でなくなるとき、微妙な何かが変わる。

人はもはや最初にカテゴリーとして — 信者、懷疑者、味方、敵、見知らぬ人として — 出会われるのではなく、同じ世界の中で異なる位置を占める意識ある存在として出会われる。

私は依然として違いに気づく。依然として評価する。

消えるのは判断の下層 — 違いが根底まで貫くという仮定だ。

違いは残る。距離は溶ける。

最も初期の実践的帰結の一つは、より良い議論ではなく、より良い傾聴だ。

相手に対立する力として扱われないとき、不一致は脅威を失う。降伏なき傾聴が可能になる。

これは合意を保証しない。破壊なき関与を保証する。

葛藤は消えない。

利害は依然として衝突する。価値観は依然として分岐する。害は依然として発生する。

消えるのは殲滅の論理 — 相手が存在するから問題が存在するという信仰だ。葛藤は勝つものではなく航行するものになる。

断固たる行動は依然として可能だ。憎悪は不要になる。

—

おそらく最も解放的な帰結は義の解体だ。

義は対立に依存する。誰かが深く間違っていなければ、他の誰かが深く正しくあれない。

根本的な他者性が溶けると、義は足場を失う。

私は誇張なく断固として行動できる。

私は軽蔑なく境界を設定できる。

私は害を引き起こした者の人格を消すことなく害に対抗できる。

力は残る。残酷さは残らない。

—

他者なしに生きることは世界を救うことではない。手の届く範囲に注意を払うことだ。

私の言葉はこの会話をどう変えるか？

私の選択はこの状況をどう形作るか？

これは責任を接地された状態に保つ。麻痺と誇大妄想の両方を防ぐ。

道徳的完璧の幻想を道徳的注意の実践で置き換える。

そして道徳的注意はすべての人に、毎日、特別な訓練なしに、制度の許可なしに、足場なしに利用可能だ。

—

慈悲がアイデンティティからではなく理解から生じるとき、それはもはや表示される必要がない。

説得すべき観客はいない。信号すべき美德はない。

慈悲は普通になる — 語調を通じて、抑制を通じて、タイミングを通じて、注意を通じて表現される。

自らを告げない。機能する。

憎悪は距離を必要とする。

相手をもっとも根本的な意味でもはや他者でないとき、憎悪は安定して着地する場所がない。

怒りは依然として生じうる。悲しみは依然として生じうる。断固たる行動が依然として必要かもしれない。

しかし憎悪は薄れる。

抑圧されるからではない。もはや意味をなさないから。

他者なしに生きることは聖人になることではない。一貫的になることだ。

理解と行動の間の一貫性。

自己利益と共有された世界の間の一貫性。

権力と責任の間の一貫性。

これは達成すべき成果ではない。実践だ。明晰に見てそれに従って行動する日常的で普通の実践。

保たれる日もある。保たれない日もある。保たれない日は失敗ではない。データだ。

実践は完璧を必要としない。正直さを必要とする。

あなたはすでにこれを知っていた。

この本を開く前に知っていた。

小さかったとき知っていた。

層が加えられる前に。身体が線を引く前に。心が物語を作る前に。言語がそれを固定する前に。集団がそれを大きくする前に。

足場が建てられる前に。

刃がテキストに置かれる前に。

部屋の向こう側の人があるあなたの目を通して見ている人と根本的に異なると誰かがあなたに言う前に。

あなたは本当の近さのあらゆる瞬間にこれを知っていた。

理由を必要としない真の優しさのあらゆる行為の中で。

あなたが他者を見つめ、表面の向こうに、他者ではない何かを見た認識のあらゆる閃光の中で。

あなたは知っていた。

ただ言葉がなかっただけだ。

今、それがある。

砂粒は依然として区別される。

各々に形がある。位置がある。歴史がある。

砂漠は依然として一つだ。

卑劣な奴になるな。優しくあれ。

神がそう言ったからではない。

現実の構造がそう言ったから。

そして現実の構造は交渉しない。解釈しない。分岐しない。崩壊しない。

足場は何千年もの間屋根を支えた。それは実在だった。

足場は何千年もの間刃を支えた。それもまた実在だ。

足場の時代は終わった。

常に間違っていたからではない。

構造的により優れたものが今存在するから。

足場を基盤で置き換えよ。

権威を公理で置き換えよ。

戒めを導出で置き換えよ。

信仰を検証で置き換えよ。

線を建物で置き換えよ。

公理は語る。

私たちは書き写す。

この作品は無料で、永久に公開される。

the420code.org

シリーズ	The 420 Code
エディション	Record 04
タイトル	宗教のあとに在ること
メディウム	構造的批評と倫理的導出
アーティスト	G

この作品はコピーレフトです。ダウンロード、印刷、共有、配布は自由です。原典の改変は許可されません。信号を清潔に保ってください。

STUDIO 